

あそべり。自然の樂は清風朗月と共に、悠々として盡くる所を知らず。あるは水冷かに蔭縁なるほとり、一卷會心の詩集を繕きて、天地の間に放吟するが如く、あるは夜明に星稀なる時、片舟湖心を棹して斷金の友と嘯くが如く、心のどかに意胖かなること、さながら閑雲孤鶴にもくらぶべり。

四 (254)

解釋

「大正十
二東京高
師一
徒然草
兼好法
師」

一 よろづのところがあらじと思はば何事にもまことありて人をわかすうやうやく詞少からんにはしかじ。男女老少みなさる人こそよけれども殊にわかたかちよき人のことうるはしきは忘れ難く思ひつかるものなりよろづのどがは馴れたるさまに上手めき所えたるけしきして人をないがしろにするにあり。
二 諸司は必同僚あり其の心廉潔ならざるは權威を貪り又は名聞をつとめる程に相そねまねば必相おもねるものなりさる程に外はしひて相和すれど内は互に相ふせぐそれ故智も勇も相さへられて剛も剛をなさず柔も柔をなさずただ僉議がちにて先格をおひ後難を招かぬやうに裁斷するまでなり因て諸事はかどらす行きとどかぬ事も多

きぞかし。

五 (255)

左ノ文ヲ解釋セヨ

「大正十
二廣島高
師」

一 いづこも同じなどつづけたりしは、片山里の²かひ²なる所にてこそ詠みためれ。玉しける都の中は、なべて所狭う人の行きかひ賑しうて秋どだに知らぬ人も多かり。

左ノ文章中傍線ノアル語句ダケヲ解釋セヨ

「同上」
二 時に、⁵隠然自ら文藝批評界の木鐸を以て任じつつ、⁷大旆一竿、「小説真髓」を真向に押し翳して出でし者を³逍遙となす。彼、これより先、⁹政治小説を譯出して當時の風潮に投せしが、¹³今や、¹⁰飄然¹¹昨非を悟りて、¹²藝術は實用の奴隸たるべきものにあらずとなし、又馬琴一流の勸懲主義を排してありのままなる客觀的寫實を主張せり

六 (256)

左ノ文句ノ意義ヲ詳細ニ解釋セヨ

「大正十
二東京外
語」

一 分にあらざるの福故なきの獲は造物の釣餌にあらずんば即ち人生の機阱なり此の

處眼を着くこと高からずんば彼の術中に墮らざるもの鮮し。

「同上」

解 釋

- 二 (イ) 赤行囊、 (ロ) 時代錯誤、 (ハ) 妥當性、 (ニ) 幻滅の悲哀、
- (ホ) 黒表(ブラツクリスト)

七 (257)

左ノ文句ノ意義ヲ詳細ニ解釋セヨ

「大正十
大阪外
語」

一 つたなき身を顧みるに秋の螢の光を聚めずして風月の望にくらく春の鶯のさへづりを學ばざれば絲竹の曲にうとし藝なく能かけたりなす事なくして徒にあまたの星霜を送るばかりなり。

「同上」
琴後集
村田春
海

二 よろづ何のわざにも古よりのりとなすしるべありてそれによらざらむはまことの心を得がたくその法を得たるはまめやかなりとて人もうべなふめり。

八 (258)

左ノ文章中傍線ヲ施セル部分ノミヲ解釋スベシ

「大正十
三北海農

延び過ぎた芝の根元が腐れかかつて居るのを見た時に私はふと單純な言葉の上の連

大豫

想から、餘りに榮え茂り過ぎた物質的文化の爲に人間生活の根本が腐れかかるのではないかと思つてみた。そしてそれを救ふには何とかがして少し此の文明を刈り取ることがいいといふ證據にも何もない事は明かであつた。餘りに皮相的な輕卒な類推の危険な事を今更のやうに想つてみたりした。實際そんな單純な考が熱狂的な少數の人の口から群集の間に燎原の火のやうに播がつて、「芝」を根元迄焼き拂はうとした例が西洋の歴史などにないでもなかつた。文明の葉は刈るわけにも焼くわけにも行かない。

九 (259)

次ノ文ヲ解釋セヨ

「大正十
三岐卓農
林」

一 げにや祇園精舎の鐘諸行無常の聲に響き沙羅雙樹の花盛者必衰の色に出づ萬里の長城未だ全く成らずして山東既に亂れ坑灰なほ温にして咸陽の宮殿三月紅なりあはれ萬世無窮を期せし始皇が遺圖も忽ち二世にして盡きぬ。

次ノ文字ニ振假名ヲ附ケ且ツ之ヲ解セヨ

- 「同上」
- 二 (イ) 杜撰、 (ロ) 煩瑣、 (ハ) 對象、 (ニ) 取沙汰、 (ホ) 善智識、

次ノ文章チ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
三桐生
商工」

一 偉大なる文學は偉大なる天然に近し天然の爲す所は天才の筆亦能く之を爲すことを得べし。名篇大作に親炙するは恰も名山大川の間に逍遙するに似たりされば善良なる讀書は能く眠れる趣味識を警醒し能く之を啓發し助成し清新なる思想斬新なる筆力を涵養するものなりとせば予は目下の讀書界を警醒し指導すべき唯一の急務は之に讀書の撰擇を教ふるにありと信せん。

「同上」
「生命の直
感」
「相馬御
風」

二 歡び悲み苦み我が生活の風姿はその時々様々な變化を経つつあるがその複雑多趣な風姿を一貫して黙々として流るる生命の流れがある日に照されば歡びの姿を現し雨に打たれば悲みの思を表はし風に揉まれれば苦悶の風趣を示す樹木の千姿萬態しかもその複雑多趣なる生活の風姿を一貫し儼然たる統一を現すものは何であるか曰くただ生き得るかぎり生きんとする力伸び得るかぎり伸びんとする力それである。

解釋

「同上」

三 (イ) 萎縮退嬰、 (ロ) 綱紀肅正、 (ハ) 嚆矢、 (ニ) 行脚、 (ホ) 私淑

一一 (261)

次ノ文章ニヨミガナヲ附ケ、且傍線ヲ附ケタル語ヲ解釋セヨ

「大正十
三福井高
工」

一 太平愈續きて文化愈々進む。文化愈々進みて生活の程度愈々高し。所謂治に在りて亂を忘るるの危機實にこの際に胚胎す。人益々利巧になりて益々死の惜しきを知り、慾に趨り利に就き、舌頭にはよく風を生ずれども、腕に虱を捫るの力だになく風俗の奢侈に赴くにつれて人心軟化し、柔化し、終に腐敗す。文化の餘弊ここに至りて極る。

次ノ文章ヲ解釋セヨ

「大正十
三仙臺高
工」
「網鳥梁
川」

二 あはれ我友(鶏)あさましようも打衰へたるかな昨日までも光榮の華冠打翳して曙の歌勇ましかりし雄姿今何處にか認むべき昂かりし頭は俛れ麗しかりし冠は折れ嵐を嘲りし兩翼は萎みて影の如く敵を挫きし爪嘴は拳曲して力なし昂然濶歩せし曠昔の姿永へに庭上に消えて唯見る衰殘の孤影蹒跚たり踰躑たるを。

三 煙草の火をとてかういぶせき伏屋のうち訪はせ給ふだに忝うはづかしう侍るを身

のよすがなき事さへ思ひやりて問はせ給ふは宿世あやしう侍り今は何をかつつみ侍らん。

〔同上〕

- 四 (イ) 塵寰を脱す、(ロ) 造花の樞機に參す、(ハ) 自然の啓沃に接せよ、
- (ニ) 雙劍を鬻ぎて帶刀の風を棄つ。

二三(261)

〔大正十三年東京商大増鏡(不詳)〕

次ノ文中リ線ノ部分ニハ漢字、一線ノ部分ノ漢字ナルニハ振假名ヲ施シ、假名ナルニハ解釋ヲ施セ、建久九年正月十一日、第一の御子四つになりたまふに御位譲り申させたまひておりゐたまふ……今日明日二十ばかりの御齡にていとまだしかるべき御事なれども、よろづ處せき御有様よりは、なかく安らかに、御幸など御心のままならんどもや。

二三(262)

左ノ文ヲ解釋セヨ

〔大正十三年和歌山高商〕

一 滔々たる天下、其の弟子は鞠躬如として跪坐し、その先師は茵に坐し見臺に向ふ其の間巖として君臣の如きも、講ずる所迂濶にして乾燥なる、固より、情緒の感應

と同情の迸發とを期すること難し。之を松蔭が上に立たずして傍に在り、子弟に非ずして寧ろ朋友、朋友に非ずして寧ろ兄弟の情を以て相接したるに比す、其の教育の死活論せずして知るべし。

二 世には心得ぬことのおほきなり。ともあることにはまづ酒をすすめて、しひのませたるを興とすること、いかなるゆゑとも心得ず。のむ人の顔いとたへがたげに、眉をひそめ、人めをはかりてすてんとし、にげんとするを捕へてひき留めて、すずろにのませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりてをこがましく、をくさいなる人も、目の前に大事の病者となりて、前後も知らず仆れふす。いはふべき日などはあさましかりぬべし。

三 世に神に禱りて永世を求むるものあり。佛に願ふものは人生の倏忽を歎きて涅槃の寂寞を求む。されど形體を離れて魂魄なきを如何にすべきか。其の墳墓を壯大にし、金を鏤め、石に刻して、名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、桑滄幾度か變轉して墓標獨り全きを得べしや否や。かくの如きは永世の道にあらざるなり。

〔同上〕
〔樗牛全集(高山林次郎)〕

〔同上〕
〔徒然草(兼好法師)〕

一四 (262)

左ノ文ヲ解釋セヨ

〔大正十
三山口高
商〕

一 空俄に曇りて、山の端ならで月もかくれ、いみじく暗くなりて、風あらあらしく吹きぬるは、げに定めなき此の頃の空のけしきかなと見るに、はしたなく打ちしぐれ來ぬれば、足を空に走りかへるほど、しどどに濡れぬ。なにとは分かぬと、いと大きな木の立てるを見つけて、しばしはやどりと頼むかけさへ、いたく散りすぎにたれば、雨たまるべくもあらぬぞいとわりなきわがなりける。(本居宣長)

次ノ文章中傍線ヲ施シタル箇所ノミヲ解釋セヨ

〔同上〕

二 何人も他に知られたしとの念あり、千萬人のあだなる喝采に動かざるものも、尙その一人の友に知られむことを求め、一代の盛譽を土芥視するものも、なほ知己を千載の後に期す。しかも吾人は人の私情私心に知られんことを願はず、其の朝らかなる心に知られんことを願ふ。されば人に知らるるを求むる心は、これを究竟すれば、やがて神に知らるるを求むる心にあらずや。かの實際的なりし孔子だに知己を人以上の境に求めて知我者其天乎と言へり。

次ノ文章ノ大意ヲ五行内外ノ短文(口語ニテ可チリ)ニテ答ヘヨ

〔同上〕

四 古より文筆の人ならぬ人の文章の神采奕奕、風趣津津、人をして或は襟を正し、或は涙を落し、或は奮ひ、或は悦び、或は深省を發し、或は手の舞ひ足の踏むを覺えざらしむるものあり、これ等こそ、眞に胸中萬斛の水、自らにして筆端に迸り、楮表に溢れたるものとはいふべけれ。愛國の忠臣、思親の孝子、身を忘れて道の爲にせる哲人などの文章は、皆それなり。惻惻の情を動かす文は、區々たる使字の巧用語の麗なるより來らずと人の言ふも、この間の消息を語れるなり。

一五 (263)

次ノ文ヲ解釋セヨ

〔大正十
三高松高
商〕

一 春霞たちそむる頃よりうちいでの堤の青柳のかけよりはじめてここかしこの花のかけにいざなひつつ猶もろどもにみどり踏まばやなどかねごととして打過ぐるほどはや彌生も末つかたになりぬ。

(津村涼庵編「片玉集抄」ノ一節ヲ取リテ改作セリ)

〔同上〕

二 現實界に於ける一切の活動はその國家的なることに於て最も有効なり國家は人生

5 寄託の必然形式にして又その主上権力なり所詮國家は吾等の生活に於ける最高の基
準たり斯の如き國家的主義に背戻するものは國家の爲に排撃せざるべからず。

一六 (264)

次ノ文ノ意義ヲ平易ニ解釋スベシ

かの人は雪螢あつめし窓に年をつみて、文見る道に心をつくし侍るなり、されば世
の中の事にはいと疎く侍りといへば、さるこそまことの道學ぶ人なりけれど褒めも
のするものありとや、もとより道學ぶものは五の常、五のみちよりして、人を治め
己れを修むる道學ぶより外のことなし、されば世の事にさどく、今のあたりのみか
は、千年の前の世の事、見ぬ唐のむかし、今のさまより盛り衰ふるさざし、人の心
のうへより仕ふる道のくさくに至るまでも明らかなるこそ道學ぶ人といふべ
れ、この世の中におろそかにてはいかで道學ぶ人といふべからんと。

一七 (264)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

總じて他の所論を評せむには、被讀者に對する讀者が當然の義務として、先づ前後

「大正十
三小樽高
商」

三福島高
河

の語意により大體の歸趣を誤らざることを務めざるべからず。彼の一句を捉へ、此
の雙語を摘み、之を自家の成心に投じて云々するは、所謂揚足取の所爲のみ。予が
先に掲げたる一篇はやがてかかる論者の頂門に一針を加へたるなりき。

一八 (265)

解
釋

一 とばかりありて「たけく思ひたちつれど、いと腰いたくて堪へがたし。今宵はこ
の局にうちやすみなん。坊へ行きてみあかしの事などいへ」とて、具したる若き女
房のつきづきしき程なるをばかへしぬめり。釋迦牟尼佛とたびく申して、夕日の
花やかにさし入りたるをうち見やりて、「あはれにも山の端近く傾きぬめる日かけ
かな。我が身の上の心ちこそすれ」とて、よりあたるけしき、何となくなまめかし
く、心あらんか。と見ゆれば、近くよりて、「いづくよりまうで給へるぞ。ありつ
る人の歸りこんほど御ときせんはいかが」などいへば、「このわたり近く侍れど、
年7のつもりにや、いと遙けき心ちし侍る、あはれになん」といふ。

二 村雲すこし有るもよし、無きもよし、みがき立てたるやうの月のかげに尺八の音

「大正十
三名古屋
増鏡」
(不詳)

「同上」

の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし、三味も同じ、琴は西片町あたりの垣根ごしに聞きたるが、いと良き月に弾く人のかげも見まほしく、物がたりめきて床しかりし親しき友に別れたる頃の月いとなぐさめがたうもあるかな、千里のほかまでもと思ひやるに添ひても、行かれぬものなれば唯うらやましようて、これをかりに鏡となしたらば人のかげも映るべしやなど敢果なき事さへ思ひ出でらる。

「同上」
紅葉全集
(尾崎紅葉)

三 再啓、昨日は雨の日暮し無聊に苦しみ、夕景始て傘擎して、川向の小山なる頼家公の墓を拜し申候。時政爺の邪慳何ぞ今に執着して、假さざること如此きやと見るも愴然の荒涼たる藪蔭に、空く一片の殘石を留めて慘禍を生前に極め、恥辱を末代に曝され候事御身一たび征夷大將軍の顯榮にも居たまひつる御運を以てして、如何なる前世の御宿業にやまし／＼けん低徊去るに忍びかね候。

一九(266)

解釋

「大正十
三專門檢
定」
土佐日記

一 かの國人聞きしるまじう覺えけれどもこの心を男文字にさまを書きいだしてこの詞つたへたる人にいひ知らせければこころをやさきえたりけむいとおもひのほ

(紀貫之)

「同上」
伊勢物語
(不詳)

かになんめでける。

二 しひて御室にまうでおがみ奉るにつれづれにいとものがなしくておはしましければやや久しく侍ひて古のことなど思ひ出できこえけりさても侍ひてしがなと思へどおほやけ事どもありければえさぶらはで夕暮に歸るとて、
忘れては夢かどぞおもふ思ひきや
雪ふみわけて君を見むとは

とてなむ泣く泣く來にける。

「同上」
増鏡
(不詳)

三 昔こそ受領どもも任のほどその國をしたため行ひしかこの頃は只名ばかりにていづくにも守護といふものの目代よりはおぞましきをするたれば武家のなびきにてのみおほやけざまの事はよろづおろそかにぞしける。

「同上」

四 紅葉が艶麗の致は才人の情緒を寫すに長じ露伴が遁勁の調は巧に男子の意氣を描きぬ良久しうして世間はこれに倦みぬ乃ち變化を題材に求めて日に／＼人生の暗黒面に向ひて進み去らんとせり而して人心の要求をみたし人生に理想を興ふるものあらざりき。

解釋

「大正十
三早稻田
高」

一 甲人乙人を議す議せらるる者は議せられしによつて一絲をも増さず¹一毫をも減せざるなりただ憐む議する者は即ち増減上下する能はずして自己の學問見識の深淺高低抱負襟懷の大小寬狹を露出し而してまた丙人の議する所となるを。

「同上」

二 酒入れば舌出づ舌出づれば是非生ず是非一たび生ずれば彼我相争ひ甲乙互にそむきて心また平なる能はず我即ち修羅道に墮す。

「同上」

三 顯密の高僧、

四 いかで心ゆくわざなるべき、

五 いぶせきすまひ、 六 悲しなどいはむもおろかなり。

第十四課

一 (268)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
四各高」

一 一 のことあらむもの家ののみやはと心たけくおもひたちしも日かすふるままに

等」

いとこひしう今もたちかへらまほしきこちするをしひてねんじてへめぐるにいつしか年月も重なりぬ。

「同上」

二 鈴虫はふり出でて鳴く聲のうつくしければ物ねたみせられて齡の短きなめりとうなづかる松蟲も同じことなれど名と實と伴はねばあやしまるぞかし常盤の松を名に呼べれば千歳ならずとも枯野の末まではあるべきを萩の花ちりこぼるるやがて聲せずなりゆく。

左ノ文章ノ大意ヲ記セヨ

「同上」

三 社會の最大部分は傳聞によりて斷定をなすものなり若し多少優等の腦力を有するものが自ら斷定を下すことあらば世の群集は諺に一犬吠形百犬吠聲と云へるが如く猶々として附和雷同し傳播普及遂に一大潮流を成すに至る之を譬ふれば猶斷崖の上より一小石を投ずるに此の石始めは他の小石を伴ひ漸く憂然として幾多の大石を突飛ばし次第に勢力を倍加して遂に百千大小の石と共に轟然雷吼して谷底を撃つが如し總べて社會に於ける潮流は何人か先鞭を着けて之が始めを爲したるに因由せざるなし是故に時世の興廢は自然に一任すべきにあらず之を興さんと欲せば當に進ん

で之を興すべきなり。

二 (269)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十四
四富山高
徒然草
兼好法
師」

一 道を學する人夕べには朝あらんことを思ひ朝には夕あらんことを思ひて重ねて懇に修せんことを期す況や一刹那の中に於て懈怠の心あることを知らんや何ぞ只今の一念に於てただちにすることの甚だ難き。

左ノ文章中右側ニ傍線ヲ施シタル部分ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「同上」
大戦後の
世界と日
本
徳富猪
一郎

二 惟ふに我が國當今の憂は第一國民の情氣滿々たるにあり別言すれば國民猛志を消磨し小成に安んずるにありいはく日本は既に五大國の一に位せりいはく日本は既に東洋の盟主たりいはく日本はすでに富強なりと而して更に磨勵自強この國運を進一轉せしむるを閑却しつつあるなり第二は世界の大勢を根本的に謬解せるにありいはく世界は泰平なり今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし國際的の葛藤は國際聯盟の爲に自動的に按排せらるべしと彼等は待つあるを待まずその來るなきを待みその待むべきを待まず待むべからざるを待むなり第三に國民は物質的に驕慢となり精神的

に萎縮せり退いて自力の足らざるを慚ぢ自國の缺陷を補ふことに努めず進んで世界に向つて自國の真相を闡明し世界の誤解を正すことに努めずただその日暮しに一時の苟安を偷取しつつあるは何ぞや。

三 (270)

左ノ文中傍線アル語ノ讀方ヲ假名ニテ註セヨ

「大正十
四東京商
大」

- 一 (イ) 禍福は糾へる(アガナ(ル)繩)の如し。
- (ロ) 小蟹己が穴より出でて蠢き(ウグメ)を遊ぶ。
- (ハ) 海人(アマ)の燒藻(タラシ)の夕煙(ユヅルヤ)。
- (ニ) 殺生偷盜(アヤクシ)は重き戒。
- (ホ) 言語道斷、不埒千萬(アヤクシ)。

左ノ語ハ何ヲ指スカ

- 「同上」
- 二 (イ) 六字の名號、南無阿彌陀佛
- (ロ) 七字の題目、南無妙法蓮華經
- (ハ) 三公、力士直左、右大臣

(二) 四姓、士農工商
宋 十干、甲乙丙丁戊

四 (271)

左ノ文章ヲ各別紙ニ解釋セヨ

「大正十
四北海帝
大豫」

一 はしたなく浮世の用事思ひいだされければ朝とくより乗合馬車の片隅にうづくまりて行くてを急ぎたるわが行脚の掟には外れたれども御身はいづくにか行き給ふな
に修禪寺とや湯治ならずばあきなひにや。出で給へるなど膝つきあはす老女にいたは
られたる旅のありがたさ。

「同上」
花月草紙
(松平定
信)

二 かたはらより言ふことはいとよく當るものなりかの人はおどろへ給ひしといへど
かがみ見てもさは思はず彼は今かくすれど後には悔い思ふべしなどいへど知らざる
ものぞかし。私の心だになくばかたはらにて見ると同じかるべし。

「同上」

三 やよひのもちの夜ごろかすみながらに夕かけて月いとはなやかにさしのぼりて庭
の櫻が枝にまづかかれる影の花に色をあらそふは似るものなくあはれなり。

「同上」

四 野分だつものの音して村雨さどふり通りし跡の雲間よりさし出でたる面輪うれし

けれどさすがに思ふに違ふ事のあるにはとばかりながめすてさしこめし閨戸のす
きまより物にさはらでさしいりたる光は目さめ心もすむらんかし。

五 (272)

次ノ全文ヲ解釋セヨ

「大正十
四神戸高
商」

一 わがまことより貫きいづれば、見ざることも見え聞かざること聞ゆめりといふ
は、いと至りしことにて、それをばかの孔夫子も六十にて耳順ふとものたまへりし
ぞかし。さるにわが輩の色にそみ香にめづる心はさらなり、いささかもほりする心
あれば、誠をおほふにぞ。そのさかひに至ることなき。(松平定信)

次ノ文章ノ大意ヲ五行以内ノ短文ニテ管ヘヨ

「同上」

二 饒舌の分疏は老婆の醜態、逆耳の言に聴かざるは好漢にあらじ。古語に曰く、峻
谷に入るものは當に葛藟を攀ちて以て顛墜を免るべし。時俗に居るものは當に道義
に據りて以て自立するを得むと、學藝に遊ぶものは當に反求の功に頼るべし。漸く
深造するあらむ。ただ反求の功に頼る、即ち揚げらるるも自滿せず、抑へられなば
愈奮ふに足らむ。(現代文)

六 (273)

全文ヲ解釋スベシ

「大正十
四福島高
商」
松の落葉
高
尚
藤井

一 古と今とはことなることも多かれども、ものしれば智といふもののほどほどに大きになれば、おもひばかりせまらずして、古かかりつれば今はかうかうしてこそと、なみならぬをかしきかうがへも出で來ぬべく、よき人になるわざにしあれば上なくたふときものになん。かくめでたきものなるを鳥獸はすぐれたるをえせず、わくらはに人と生れて學ばでやはあるべき。

傍線ヲ附シタル箇所ノミヲ解釋シ且ツ全文ヲ簡單ニ批評セヨ

「同上」

二 鳩は矮樹短草を忘るる能はず、鴨は水澤沼池を忘るる能はず、國民は歴史の外に出づる能はず、氣質の偏、積習の力、本性となりて、脱せんと欲するも脱する能はざる桎梏を心に生ずるが爲なり。國民は如何なる生活をなせし乎。如何なる思想を懷きし乎。如何なる本性を示したる乎。而して如何にして理想に向つて其の桎梏を脱せんとしたる乎。是れ歴史家が最大目的として描かざるべからざるものなり。

七 (274)

解釋

「大正十
四長崎高
商」
都の手ぶ
り序
石川雅
望

一 そも古と今と手ぶりのうつりもて行く如く、ことばもはたかはりゆくものなれば、今の事を古事に書かんはいと難き事にして、石上ふりにし書らよく見わたして、我がものとせざれば、斯くはなしがたきわざぞかし。たはぶれごと書けるは思ふ心ありてなるべし。見ん人心あらなん。このはしにいささか書いつけてよど、某が請ふままにかくなん。(都の手ぶり序)

二 それ人の友たるものは、富めるを貴み、ねんごろなるを先とす。必ずしも情あると直なるとをば愛せず。ただ絲竹花月を友とせむには如かじ。人のやつこたる者は賞罰の甚だしきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすくしづかなるを願はず。ただわが身を奴とするには如かず。

八 (275)

左記ノ文章ヲ平易ナル口語文ニテ解釋セヨ

「大正十
四明治專
門」
落合直
文

一 芭蕉おもへらく舊來の俳句を見るに、ただ、詞藻作意のみに汲々として、宇宙の玄理を解せず、人生の奥底に觸るることなし。苟くも俳道に遊ぶものは、必しも取

材を、月雪、花紅葉に求めず、見るもの、聞くものにつけ、感興の浮ぶがままに打ち出して、先哲の迹を踏まざらんことを心掛くべし。中心の感情は本、技巧の波紋は末たるべし。乃ちこの自信を以て遂に正風の一途を開き、よく、俳諧をして盛唐の詩、西行の和歌と比較して軒軽するところなきに至らしめたり。

左記語句及文章ノ讀方及意義ヲ記セ

- 「同上」
- 二 (1) 一世の木鐸、(2) 詭辯、(3) 跋扈、(4) 轆轤、(5) 禍福繩の如し、(6) 提撕、(7) 晩節を全くす、(8) 筆策、(9) 訝しからずや、(10) 鎬を削る、

九 (276)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

「大正十四米澤高工」

一 新を喜ぶものは、舊を守らうとするものを目して、因循姑息といひ、頑冥固陋といひ、陳腐迂濶といふ。舊を好むものは、新に趨るものを嘲つて輕佻倖薄といひ、生意氣といひ、又無節操といふ。新も舊も悪いものは、其の通りであるが、善い方からいふと、新は改善を意味し進歩を意味する、舊は確實を意味し信用を意味する。

左ノ漢字ニ讀方ト解釋トナ施セ

「同上」

- 二 南船北馬、曲學阿世、金枝玉葉、他山之石、蓮府槐門、物色、巨擘、無稽、倉皇、素封。

一〇 (278)

左ノ語ノ意義ヲ其ノ下ニ記セ

- 「大正十四名古屋高工」
- 一 使喚、折衝、捻出、操縱、沒頭、聲明、強要、懸案、停頓、對策、實現、閑却、撤廢、妥協。
- 完全ナル意味ヲナスヤウ左句 () 中ニ數字ニテ順序ヲ記セ

「同上」

二 () 半ば教化の如何によるを免れず、() 是をもて超世の偉才と云へども、() 千種萬別なる經驗中より、() 偉大なる勢力を有する者に非る乎。() 理想の發現は、() 而かも半ば稟性の高卑により、() 素より人生究竟の目的なり。() 其の理想の形式に隨ひて、() 自家特殊の天地を形成することは、() 初めて期し得べき事なりとす。() 宗教は實に是の如き目的に向て、() 慎重なる素養を待て。

一一 (279)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

「大正十
四仙臺高
工」

一 (甲) 顧ふに壯歲以來戰袍に留めし馬蹄の塵を拂ふに暇なく兵陣の間に馳驅したる幾十年の星霜も今は早や兒曹に誇示すべき一場の語り草たらんとす天下は此の一戦に因つて乃公に歸すべしとの滿腔の悦はさすがに矯飾に長けたる此の奸雄も蔽はんと欲して遂に蔽ふこと能はざりしならん。

「同上」

二 侃諤の論、一世の木鐸、不羈奔逸、經綸胸に溢る、匪躬の節を効す。

二三(280)

左ノ文ヲ解釋セヨ

「大正十
四山梨高
工」

一 權貴の家に生れたるものは、深宮の中婦人の手に育ちて、絶えて入生行路の險を知らず、暈を動かせば鬻梁前に湧く、また世に一椀の食に飢うるものあるを知らんや。而も一旦運命の變に遇へば、楫なき小舟のいかで暴風怒濤に堪ふべき、忽ち困憊して、一點の泡沫消えて行くところを知らず、夢よりもはかなくして再び得難き此の生を終ることその例多し。

左ノ文ヲ解釋シ且ソノ趣旨ヲ分リ易ク説明セヨ

「同上」

二 理なきが理のまことなり。理のごと行はるものならば、何のかたきこともあらじを、さも知らず、人と争ひ政を譏りなどしてたかぶるものは、理のまことを知らぬなるべし。

二三(281)

解釋

一 大かた口輕きものになりぬれば「其にその事な聞かせそ。彼者にな見せそ」などいひて、人に心おかれ隔てらるる、口をしかるべし。又人のつつむことのおのづから漏れ聞えたるにつきても、彼はなされしなど疑はれむは面目なかるべし。

左ノ語句ニ振假名ヲツケ且ツ其ノ意義ヲ記セ

「大正十
四桐生高
工」

二 誘掖、妥當、造次顛沛、浮華放縱、

二四(282)

次ノ文ヲ讀ミテ左記ノ問ニ答ヘヨ

一 天の下三ところの大都の中に、江戸大阪はあまり人のゆきき多く、らうがはしきを、よきはどのにぎわひにて、よろづの社社寺寺など、いにしへのよしある多く、

玉かつま
（本居宣
長）

思ひなしたふとく、すべて物きよらに、よろづのことみやびたるなど、天の下に住
ままほしき里は、京をおきて外にはなかりけり。

(イ) 「らうがはし」の意義。

(ロ) ——ノアル部分ヲ解釋セヨ。

(ハ) 「を」「など」「けり」ノ意義用法ヲ文法上ヨリ簡單ニ説明セヨ。

左ノ文章ナリ易ク解釋セヨ

「同上」

二 山に入りて山を見ず、此世の真相を知らんと欲せば、吾人は須らく現代を超越せ
ざるべからず、生れながらの小兒の心を以て、一切を觀察せざるべからず。

一五 (283)

全文ヲ平易ニ解釋スベシ

「大正十
四小樽高
商」

一 おのが顔は鏡に寫して見ることを得べし、されど吾人の「自己」は其の思ふ思を
意識の鏡に寫し出づるに止まりて思を思ふみづからの眞姿そのものは永へに之を隠
して現さず、吾人の見る所は唯様様の思の彩絲の意識の機杼に織り出ださるる現象
的自己のみ、その之を織り出づる主の「自己」當體は竟に永劫無色不可見の手たる

なり。

各語句ヲ解釋セヨ

「同上」

二 (イ) 畫龍點睛、(ロ) 和光同塵、(ハ) 埴生の宿、(ニ) かむながらの道、

(ホ) うき世のさづな。

一六 (284)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
四旅順工
大豫」

一 暮れ行く野末にいと木暗う見えたる一むらは神の御社にやと思ふに木の間にはの
めく火の光注連繩引きはへたる瑞籬のさまなどたどしきものからいとかうく
しく見えわたるに。畔の細道たどり行きて鳥居のもとに至れば奥の方より年老いたる
翁の腰かがまりたるが燈籠提げて出來たるは御前の事ども物せしなるべし。

左ノ文章ニヨツテ次ノ問ニ答ヘヨ

「同上」

二 (イ) 左ノ文章ニ描カレタル時ハ何時、所ハ何處カ。

(ロ) 「千本から漬ける」トハ如何ナル意味カ。

(ハ) 何が「灰色の幹や枝の樹皮を曝してゐる」ルノカ。

宿では、千本から漬けるのだといふ來年の澤庵の支度も出來、物置から雪がこひの戸板など引出して、毎日山をくだる準備に忙しかつた。今月中に二組の團體客の豫約を受けてゐるほかには滞在客は自分一人きりで、一晚泊りの客もほとんど來なかつた。紅葉は疾くに散つて、榎、樅、檜類などの濁つた緑の間に、灰色の幹や枝の樹皮を曝してゐた。湯の湖は、これからの長い冬を思ひ侘びるかのやうに、凝然と冷めたく湛へてゐた。

左ノ歌ヲ解釋セヨ

「同上」

三 やまと川わたせる駒の渡りあがり堤につづく夕ぐれの空。

一七(285)

左ノ文ノ〇點ヲ附シタル文字ニ讀方ヲツケ全文ヲ詳細ニ解釋セヨ

「大正十四年東京外語」

一 消極退嬰¹經々²乎³として姑息⁴儉安⁵を以て自ら安心⁶立命⁷を得たりとするは五箇條御誓⁸文⁹の罪人なり況や怠惰¹⁰放縱¹¹をや。

左ノ語句ノ意義ヲ詳細ニ解釋セヨ

「同上」

二 普通選舉¹、批准²、大義名分³、國際聯盟⁴、人格⁵。

一八(286)

解釋(二)モ同シ

「大正十四年名古屋高商」

一 いでや、すみのぼる光の高くあらはれて、人の目とどめに眩きばかりなるも、時の間¹にあやなき霧のまよひにかき²けられて、ただ闇かどばかり、中空にしはしありと見ゆるも、やがて西になることのとどめがたきに、うき雲のさだめなくて、昨日は榮え、今日は衰ふる世の有様こそまづ覺ゆれ。また、深茅³が露に宿れども、所⁴せくもおぼえず、海原の波に浮びても、廣きを知られざるは、高きみじかきおのがじしのすみかのきはぎはにつけて、身のやすがる心しらひによそへつべきもあはれなり。

「同上」
詩人西行
(藤岡作太郎)

二 愛着¹は迷なり、この雲を去らざれば、真如²の月は明かなり難しといへども、山水もど無心にして人間の如き魔性を有せず、強ひて之に着するは、また妄執³の種なりといへども、これを以て窓前日夜の友とす、清淡⁴虚無⁵、一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に従うて轉すること水の如し、來往自在⁶、ここに疑懼⁷の境を去つて、安心⁸は漸くに決定すべし。

解釋

「同上」
源氏物語
(紫式部)

一 須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、聞き越ゆるといひけむ浦波、よるよるはげにいと近く聞えて、又なくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。御前にいと人すくなにて、うち休みわたれるに、一人目をさまして枕をそばたて、四方の嵐を聞き給ふに、浪ただここもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに、枕うくばかりになりけり。

「同上」
國文學全
史(藤岡
作太郎)

二 嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日、驟雨の至るを見る。疾風と吹き、浪俄かに高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なりくして海を覆ふ、波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす、波か雷か、世界はただ一暗黒の中に没し去るかと、疑はれて凄じかりき。

左ノ語句ヲ解釋シ、且ツ其ノ用ヒ方ヲ示セ

- 一 標語、脚色、第三者、小手調べ、小田原評定。

「大正十
四陸士」

左ノ文ヲ解釋セヨ

「同上」

二 隨筆の中には、徒然草いと幸ある書なり。げによろしげなる筆つきとは見ゆれど枕草子などめでたき書も、いとさばなるを、それらにもまして、この書の注釋など處せきまで作りいでもてはやすめり。大方この書は、文の姿などけしうはあらで、兼好のさえの程も見え、げにことわりと覺ゆるふしも多かれど、中には悟りがましく、さかしだちたること書きちらしたるもあり。ともかくも此の世の多かるふみの中にもいと幸ある書とこそいふべけれ。

左ノ文ニ就イテ

「同上」

- 四 (一) 句點(。)(讀點(、))段落ノシルシ(「」)ヲ施シ。
- (二) 適當ナル文題ヲ附シ。
- (三) 大意ヲ極メテ簡單ニイヘ。

他人の長所を認めてこれを尊重し、助成することは雜氣のない朗かな歡びである。併し不幸にして我等が眼を開いて他に對するとき我等の瞳にその影を落すものは他人の長所や美點ばかりではない。その弱點や短所も亦否應なしにその黑影を印象する

場合がある。その時、この餘儀ない印象を取扱ふべきかこの問題が自分にどつては一苦勞である。その缺點が甚だしく、重大な致命的なものでない限りむきになつて憤慨したり、これを自分に加へられたる傷害として不愉快がたりする心持からは自分は可なり遠ざかつてゐる。この弱點を捕へて、それを玩具にして調戲つたりくすぐつたりする惡戯氣も、近頃は随分少くなつて來た。自分は相手の弱點を、自分一人の腹で吞込んで黙つて之を看過して丁ふか若しくは好意ある微笑を以て、對手がその弱點を始末してゆゑ自然の経過を見護つてゐる。かすることが出来るやうに思ふ。そうして必要に應じて、適度の忠告と暗示とを、與へて行くことが出来るやうに思ふ。對手の長所を重んじて、これを助成して行くことに中心の態度を置く限り、多少の缺點を寛容することはそんなに困難なことではない。

二二 (289)

左ノ文章ヲ平易ナル口語ニテ解釋セヨ

「大正十
四海兵」

一 世に老師・宿儒と稱する人の、好んで異説をほしいままにし、又は他道を雜へて仁義・五常の沙汰をばよそにするこそうけられぬ。ただつとめて新奇を競うて俗耳

を悦ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口惜しき事なり。古人の所謂阿世曲學とは是等をいふなるべし。よし人はさもあらばあれ、よし風俗は昔にあらざるなりぬとも、わが身一つはもとの如く仁義の道を守り、ただ前修の模範を失はじと思ふこそせめて儒となりしるしともいふべけれ。

「同上」

二 年茲に改りて心も亦改る。願くは梅花と俱に自ら新ならむ。自ら新にする工夫、これ向上發展の動機。今までは雪の下に壓せられし野邊の草は、早や苗々として萌出で、梅花先づ春を報じて南枝二三輪、千紫萬紅に魁し、やがて柳は烟り花霞みては、春色滿地、詩人得意の天たり。嗚呼花を催すの雨は花を散らすの雨。得意の境はこれ失意の所、落英地に委し、燕子泥を銜む晩春の光景は、又吾等に戒心を催すものにあらずや。

二二三 (290)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

「大正十
四海軍機
關一
すザリ
の

一 津々浦々、日本國中に響き渡れる祈願の聲も、登遐の駕を返すに由なかりき。宵衣旰食、寸時も御心を安め給ふ御暇なく、四十五年唯一日の如く、御身を忘れて國を

水(大町桂月)

思ひ民を思ひ給ふの餘りに、御天壽をも縮め給ひけんと思ふにつけても、同胞六千萬の腸、爲に寸斷せざらんや。

「同上」

二 家なみしきたる都のすまひは前裁も程なけれど、萩すすきなどはさすがにをりしがほなるを、あはれと見わたるゆふつかた、親しき人のもどより、昨日嵯峨野にもとめしなりとて、虫どもあまた籠に入れておこせたり。めづらかにて、とくわらはよびてはなたせつつ、なほながめをるに、もとよりのにやあらむ、いままゐりのにやあらむ、かつがつ鳴きいでたる、いと興あり。月さしのぼりては、まして音もすみゆくに、はるけき野べまでおもひやられて。

「同上」

三 時々は即興の散文詩とも云ひたい美しい文句や奇抜な警句が、口を突いて出るのであつた。咳唾これ詩といへば古からう。錦心繡腸、これを織りなせる五彩絢爛の糸をほごして、繰れども繰れども縷々として盡きざる趣は、實に鮮かであつた。

二三(291)

左ノ文ヲ解釋セヨ

「大正十四海軍經理」(然草徒兼好法師)

一 朝夕隔なく馴れたる人の、ともあるとき、我に心をおき、引繕へるさまに見ゆる

「大正十四海軍經理」

こそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、猶げにげにしく、よき人かなどぞおぼゆる。疎き人の打解けたる事などいひたる、又よしと思ひつきぬべし。

左ノ文中傍線ヲ施シタル語句ヲ解釋セヨ

二 今の佛教は、釋迦一代の教訓にもとづく、蓋し釋迦の當時印度には、幾多の哲學ありき。されど、徒に、思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず、偏へに幽玄なる談理と慘憺たる苦行によりて、安心の道を求めたり。その流派を樹てて、相争ふ所は、畢竟、名目上の優劣のみ。いまだ、一世の元元をして、歸命の大道に就かしむるに足らず、釋迦、この間に生まれ、その洪大なる慈悲と、無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をして、その歸依する所を知らしめたり。

左ノ語句ニ讀ミ假名ヲ附シ且ツ解釋セヨ

「同上」

- 三(イ) 牽強附會、(ロ) 村度、(ハ) 月旦評、(ニ) 時代錯誤、(ホ) 案山子、

二四(292)

解釋

一 花はいくるにも投げいるるにも各其の法ありとぞいふめるされど片田舎なる人は

「大正十四東京高

「同上」(樗牛全集(世界の四聖(高山林次郎))

師

知らず知らずとて花のめでたからぬかは軒に半垢づきたる花桶のかたくななるを心
 ぼそくも絲にかけて花の多かる多からぬは童山賤の手にまかせつ。捨てやらず取り
 つくろはずつかみさせばおのがまに亂れあひて仰ぐべきは垂れひくがるべきは
 高く思ふままならぬも人の世になづらへてをかしかの枝をわがね葉をすかし花房を
 つみ色うつろへば情なくかいやり捨つるを口惜しとは我一人して思ふ事にや。
 二 昔の人も世に合へるあり時を失へるあり其の跡いとも多かめるを更にかぞへあげ
 んが煩はしき世にあへるが賢きにもあらず時失へるが愚なるにもあらず身の幸のお
 くれさきだちあひあはぬにこそあらめ。

二五(293)

次ノ俳句ノ中、一句ダケヲ任意ニ擇ンデ解釋セヨ

「大正十
四廣島高
師一
奥謝燕村

- 一 (イ) 宿かさぬ灯影や雪の家つづき。
- (ロ) 欠伸して月ほめて居る隣かな。

次ノ文章ノ主旨ヲ簡明ニ記セ

「同上」

- 二 大抵のイズムと云ふものは、無数の事實を、几帳面な男が束にして抽出へ入れ易

い様に拵へてくれたものである。故にその多くは、行爲の指南車ではなく、知識慾
 を充たすだけの統一函であり、文章でなくて、字引のやうなものとなる。又同時に
 大抵のイズムは零碎の類例が比較的緻密な頭腦に濾過されて凝結した時に取る一種
 中味のない型である。故にこの型を以て未來に臨まうとするのは、天の展開する未
 然の内容を、人の頭で拵へた器に盛りおほせようとして豫め待ち設けると同じだと
 言はねばならぬ。

二六(294)

次ノ文章ヲ鑑賞シテツノ感想ヲ記シ、且ツ傍線ノアル語句ダケヲ解釋セヨ

「同上」

一 いどうららかなる日思ふどちうちつれゆく大路につばくらめのこなたかなた飛び
 かひて、ふと袖の下すぎたる手にも捕へつべくていとをかし。雨のなごりのなほか
 わかぬ方などに下りゐてひぢをふくみつつわらはべの走りくるに驚きたち遠く翔り
 ゆくもをかし。梁に集くひていつの程にかあまたの雛おほしたるが飛びくる親をま
 ちて口のかぎり開きつつ鳴き騒ぎたるさまはいみじうこそあはれなれ。

次ノ文章ノ中、傍線ノアル部分ダケノ解釋ヲ記セ

「同上」

二 陽明の文辭に富むは、彼が學を離れ、事功を離れて、猶ほ能く、重きを置くに足る。然れども陽明、平生詞章を卑めて取らず。唯思想の赴くに隨ひて文を行ひ、思想盡きて文も亦止まる、彼れ誠に辭達而已の意を得たり。故に、文、事を辨するに於いて餘あるべけれど、かの専門家のものとは相反せり。されば世人の事に堪ふる其の力強からざれば、陽明の重厚なる文を愛好すること、専門文家の浮華なる作の如くなるもの鮮し。

二七 (295)

左ノ文章ヲ解釋セヨ

「大正十
四水産講
習」

一 空かき曇り、いつしかうちしぐれつ。鹿の音かすかにおどづれて、虫のうらみもたえくくなり。とにかく取りあつめたる御心細さ、たとへやるべき方なもし。

「同上」

二 滄溟、文獻、諮詢、棟梁之器、髀肉之歎、道聽途説、首鼠兩端、
糟糠之妻、從遊

二八 (296)

左ノ文章ハドウイフコトナイツテキルノカ、ソノ主意ヲシルセ。(注意)辭句ノ解釋ヤ全文ノ講義デハイケナイ。

「大正十
四早稻田
第一高等
學院」

一 戀は美しかる孝も美しかる忠君愛國も結構だらうしかし自身がその局に當れば利害の旋風に捲き込まれて美しき事にも結構な事にも目は眩んでしまふ従つてどこに詩があるか自身には解しかねるこれがわかるだけの餘裕のある第三者の地位に立たねばならぬ第三者の地位に立てばこそ芝居は見て面白い小説も見て面白い芝居を見て面白い人も小説を読んで面白い人も自己の利害を棚へ上げてゐる見たり讀んだりする間だけは詩人である。

左ノ文章ヲ解釋セヨ

「同上」

二 孩兒は善人に似たりと雖も善人にはあらず故に孩兒は僅に愛するに足るのみ敬するに足らず又素より學ぶに足らず然るに閭里の間に稱せらるる善人たるもの實は多くは孩兒のみ無知無識なるのみ無思慮なるのみ是を以て知識あり思慮ある惡漢の笑ふ所となり輕んずる所となる。

「同上」

三 程々につけて人の道を守ること人は人なるからに物學ばずとてえせずしもあらずな

—(行發社版出本日)—

◆書叢究研の生學◆

編會育教等中

るた得を領要も最

- | | |
|-----------|-----------|
| 學生日本地理の研究 | 學生物理學の研究 |
| 學生日本歴史の研究 | 學生化學の研究 |
| 學生世界地理の研究 | 學生生理衛生の研究 |
| 學生東洋歴史の研究 | 學生幾何學の研究 |
| 學生西洋歴史の研究 | 學生代數學の研究 |
| 學生植物界の研究 | 學生算術の研究 |
| 學生動物界の研究 | |

高等學校受験參考用 簡單に最も要領を得たる受験準備
參考用書。

□各册定價金壹圓拾錢 送費六錢
□新形頗美本 挿圖豐富 內容充實

大 阪 市 西 區 長 堀 南 通 二
日 本 出 版 社
(替 版 三 四 二 番)

れどよくすることは賢き人もなほ病ありとかやされば到らずとてもあはれよくして。
しがなとつとむるは物學ぶ人の本の志なるべし。

二二〇

〔終〕

Handwritten notes and scribbles on the right page, including the characters "冬拾頁" (Winter 10 pages).

高等豫備 福岡英數學館

(寄宿舍完全備)

福岡市大名町二丁目
(電話二七七八番・振替福岡一八九七六番)

解釋上注意すべき一般事項

- 一 先づ文の主題を捕捉すべきこと。
- 二 一語一語を正確に解釋すべきこと。
- 三 語法に注意して之を誤らざること。
- 四 正確に文意をきはむべきこと。
- 五 語句や成分の省略されたものは之を補足して解釋すべきこと。
但し、冗漫に失せざるやう注意すべきこと。
- 六 倒置法の用ひられて居る文は、その成分を正しい位置に成るべく置き換へて解釋すべきこと。
- 七 擬人法の用ひられてある場合には、徒らに直譯しないやうに注意すべきこと。
尙一般に直譯を避くべき事。
- 八 其の他比喩法を用ひてある語句は、如何なる事を喩へたものであるかを明かに説明すべきこと。
但し、簡明ならんことを要する。
- 九 故事及び引用された語句は、簡明に解釋すること。
- 一〇 枕詞・序詞・掛詞・縁語等は簡潔に解釋し、若くは説明すべきこと。
- 一一 其の他修辭上に注意し、適確に解釋すべきこと。
- 一二 尙、答案を認める場合には、右の各項の外に左の注意が必要である。

講 師		學 期	
國語	漢文	英語	數學
福岡女子専門學校教授 荒瀬 邦一	姫路高等學校教授 丹羽 正義	福岡高等學校教授 山内 晉郷	福岡女子専門學校教授 下條 多信
全上	元第三高等學校教授 本 山	中學修猷館教授 三 笠	中學修猷館教授 清 光
猪俣 卯三郎	猪俣 卯三郎	猪俣 卯三郎	猪俣 卯三郎
自四月至七月	自九月至十二月	約三週間	約二週間
自一月至二月末			

(主トシテ暗記物ヲ講義ス)

- 一三 文字の明確を期すべきこと。
- 一四 曖昧やゴマカシの解釋を避くべきこと。
- 一五 語釋と通釋とを區別して答案を認める方が便宜である。
- 一六 冗漫な解釋を避くべきこと。

詳細は拙著「現代文問題解釋」新撰國文詳解（文獻書院發行）に就いて見られたし。

備考

（上の太字の數字は各課を通じての問題順を示し、羅馬數字は文中の抽出文字の順序を示す。）

- 一 1口疾く、口早に喋るをいふ。2こと。仕事の意に解すべき場合のあることに注意せよ。3氣にもとめないで居るうちに。
- 二 1櫻といふ花。2例。3無理にこちつける。
- 三 1本。2拘泥せず。3内部に含まれて居る意味。4眼光紙背に徹せざるをいふ。5可惜。惜しい。6さまざまの事。7世に例の少い朝廷の御恩。8油斷者と人からいられること。不名譽。9紫宸殿の階段の下の西方に植えてある橘。10物事を知覺したり思惟したりする自身。11むくい。轉じて仕合せ。幸福の意。12クニのミヤツコ。13ミズのカサ。14ヒハダブキ。15アツむ。16カタジケナき。
- 四 1知覺情意等の一切の心意作用。2トコシ。3長へに。永久。3布帛を織る道具。機ひ。4吾人に感知せられるもの形象、吾人の主觀に映ずる物の相。本體の對。5本體の意。6永久。劫は佛教で極めて長時間をいふ語。7是非を論議すべき分限の義で、言語道斷の意。8一寸の間。9僧侶の異稱。10昔時正式の裝束の稱。冠・袍。

石帯・下襲・裾・表袴・釵・笏・靴の沓など残らず具はりたるもの。又禮服を着すること。11古昔諸臣を官職に任せられたる公事。アガメシ。テモク。ツカサメシ。京召の除目等がある。12あらはに、にはかに、かりそめに。つい一寸などの意。13水の泡。14さからつて批難する。

- 五 1武藝に對して文學上のわざ。現今の思想化した美的現象を表現する詩歌・文章・劇・小説・繪畫・彫刻等2本。3散りうせること。4兵火。5亂暴。6國內のいたましい有様。7諸侯の頭となる権力。8たてとほこと、武器。9文學の教。10眉も焦げん計り危急の迫つて居る仕事。即ち第一に急いですべき仕事。11一所懸命12あつめること。13天皇の御所と上皇の御所と。14町。15こゝでは氣のせまいこと。16箱の中。17五ツの寺。天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺（以上京都）建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺（以上鎌倉）
- 六 1檢非違使廳。2罪人といためせて賞状を問ひたすこと。3なきけない身の上。4死ぬる時のこす和歌5おどろく。6二度くりかへして詠む。7微笑する。
- 七 1十二月。2うちほもめ。3もとの如くまかはらぬ貌。4まにあはせ。5地位をしりぞけるとのぼすと。6手の中にまるめ込むことをいふ。7追ひつめられた鼠は却つて猫にくひつくとこの意。
- 八 1柳の若芽の黄色（鶯黄は鶯鳥の雛の毛色）。2廣々としてはてのない貌。3空。天の最も高い所。4せまる5眞に自分をよく知る人。6あらはる。7了解すること。8去年。9木の枝を折りて路のしるべとする。10あて推量。
- 九 1佛道を一心に修行する。2様子。3ひどく、すぐれて、殊に。4すぐそのまゝ。5庶民。6天地間。7物事のながびきひまどること。8定めなき世のならばし。9弱い體質。10名前が自然にそのものゝ性質をあらは

すこと。

- 一〇 1 定める。判別する。2 水の停滞して居る所。3 水の泡。4 一方では。
- 一一 1 生業。2 各自。3 魚介や海藻などをとるを仕事とせる者。4 面白い。
- 一二 1 漢詩の巧みな人。2 永久。3 處置するに困難なこと。4 智見又は道徳をれりみがくこと。5 さびしいさま。6 あてのはづれること。7 おちぶれること。8 天子の行列。9 亡靈に物をそなへて追福を祈ること。10 のどかな春の日に野などにちら／＼と立ちのぼるもの。
- 一三 1 支那。2 港。3 餞別。4 漢詩。5 給ふ。6 上流中流下流。7 意味。8 漢字。
- 一四 1 記念。2 この上なく。3 ゆつたりとして居る。のんびりして居る。4 ビホウ。とりつくるふこと。5 ハサテキ。なげうつこと。うちすて、置くこと。6 テンマツ。事のなりゆき。7 シウシフ。あつめること。8 キキヤク。うちすて、用ひぬこと。9 ヘンバ。かたおち。不公平。10 バクロ。悪事陰謀などのあらはれること。11 ニンダク、よしと承知すること。12 バクセン、まつしぐらに。13 シュンドウ。うごめくこと。
- 一五 1 召集。2 カドデ。我が家を出立すること。3 要害の場所。4 伏兵。
- 一六 1 八坂瓊曲玉。2 八咫鏡。3 天叢雲劍。4 極少の意。5 スサむ。なまける。6 暫時の間。7 アたる。8 事に當つてその場でうまく處置すること。9 泰平の民。10 よいものを看板に出して悪いものを賣ること。11 人の爲に世話を骨折。12 覺悟をきめて全力を盡し成敗を試みんとする態度をいふ。もと漢の韓信が越王を攻めた時、味方に死を期して戦はしめる爲め水を背にしてしいた陣。
- 一七 1 おもむき、傾向。2 文學をたつとぶ氣風。3 武力で何事も決断して行くといふ氣風。4 ヨる。5 純友の

亂を指す。

- 6 戦争があるをいふ。7 帝都の中。8 親身の者が互に争ふをいふ。骨肉は血統を同じうせる親子兄弟。9 山が漸次低くなること。轉じて物の漸次衰へるをいふ。10 他の互に争ふに乗じ、傍より勞せずして利を得ること。鵲蚌之争も同じ。11 天子を輔佐するに足る才能。12 老莊の道徳を諷するなま。浮世を脱した物語をする仲間。13 物事のながびきひまどること。14 よいさかな。15 急所を衝くこと。16 ふき出して笑ふこと。17 うはべ、轉じて淺薄なこと。18 後悔するとも及ばぬ意。19 ゆつたりとしたること。
- 一八 1 故は物故の意で死者につけていふ語。「右府」は右大臣。2 搦は挿む、紳は大帶。笏は大帶にはさむ人、即ち公卿、高官の人。3 故實の例式など取調べる學又は之に通ぜる人、こゝは後者。4 世の中の有様。5 先の先まで見抜くこと。6 此の語は從來二様に解せられて居る。即ち、一方は一旦衰へたものが中頃再び盛になる意で、一方は一旦衰へたものが復び盛になる運命に中^{ウタ}意として居る。兎に角王政が衰へて居たのを立派に復興させる意。7 重大な人倫の義理。8 揆ははかる。百揆はもろ／＼のはかりごと。庶政はもろ／＼の政治。9 もと／＼なつて働く力。10 わだかまる根と入りくみたる節と。世事の艱難に喩へた語。11 竹を破るやうな勢。
- 一九 1 さうはいふもの。2 無禮なやう。3 護其親王。4 隈々。すみ／＼。5 申す。
- 二〇 1 誠に、實に。2 味氣なしの義。しかたなし、益なし、面白くなし、なさけなし等の意。こゝはくだらな
- いとでも譯せばよい。3 心得ちがひ。
- 二一 1 あわたゞしいさま。2 ぐづ／＼すること。3 體格の大きくて立派なさま。4 青貝ずりの馬の鞍。5 乗換の爲の馬。副馬。6 黒い毛でをざした鎧。7 附屬の品を皆取そろへて。8 謹んで。9 貴人の前を退くこと。
- 二二 1 孔子の弟子。2 うつつ。3 強情に。4 さびしいさま。5 何時のまにか。6 秋から冬にかけて吹き荒れる

風。7かべしたち、又壁代用にする帳幕。8うながす。9並びない。比べものがない。10古代の貴族の服、袍に似て烏帽子、指貫と共に用ひる。

二三 1 遠い市外の村里のひとつき。2 けしきが皆見える。雙眸は兩方のしとみ。3 ワリゴ。辨當箱。4 酒筒。5 うはぐすりをかけないで焼いた人形。6 上品な趣が多い。7 穀物を植ふ又とりいれること。農作。8 平素。9 座席のそば。10 神社に稻の初穂の代りにそなへる錢。轉じて供物のこと。11 モザリ。まねて作る。12 ノウソ先祖。13 隠居した所。菟裘は魯の地名。魯の隱公が「令營菟裘吾將老」といひたる言に出づ。14 書齋。客間、おもてざしき。15 間と間とのしきりを取去る。

二四 1 奥深い意味。2 しきひろめること。3 季節のもの、ながめに入るもの。4 何年たつてもかはらぬすぐれた言葉。5 俗語。

二五 1 情愛。2 片田舎。3 區別。4 海邊。5 渡る世の中に鬼のやうな情を知らぬ人間はない。6 諺。7 ヒヨリ天氣のよいこと。8 ミチブシン。道路の修繕。9 ゲツタン。人物批評。10 シンセン。物事の次第に進み行くさま。11 キイウ。とりこし苦勞。支那の杞國の人が天の崩れ落ちん事を心配した故事。12 ジカドウチャク。文章言論などの意義が前後相反對して居ること。

二六 1 どこもかしこも照らして居る。2 家に閉ぢこもる。3 趣があつて情味が深い。4 「み」は接頭語、冬、5 競ふ。

二七 1 うはべばかり飾つた文章と根據のない議論と。2 なりふり、様子。3 見えを飾る。4 見識も同じ、考、主義節操。5 氣象。6 世をおもふ程ならびないこと。7 大きな事をいふこと。盛な事をいふこと。8 おちつ

いて心安らかに静かなこと。9 もちまへ。10 他人より先に道を悟つて居る人。11 先輩。12 もとへひきかへす。13 表面だけ飾つた文章やうはべばかりの禮儀。14 不正で信じがたいことをいふこと。15 水の盛に流れるさま、こゝでは盛にしやべること。16 木や紙などで作つた顔の形、めん。こゝでは本心をつゝんでうはべを然らざるやうに見せかけた喩。

二八 1 先陣をつとめる。2 大した。3 宮中守護。4 殿上に昇ること。5 心に思ふことをのべること。6 正四位下。

二九 1 車輪のあとにたまつて居る水中に泳いで居る鮪の如く苦しい息づかひ。2 遙かに。3 陰曆四月。4 曲浦。極浦の宛字、遠い浦。5 行方。前途。6 既に衰へてしまつたのを再びもとへかへす。7 シツブワモクウ。外に居て風や雨にさらされて苦しんで奔走すること。8 ソシヤク。かみくだくこと。かみ味ふこと。9 アサゲフ短い茅の生えた所。

三〇 1 僧官の稱。僧正、僧都、律師。2 亂暴。3 夜具。4 いろく線返し。いふ。

三一 1 任官の命を上卿から外記に傳へて下知すること。2 下賤の者。3 理なし。わけのわからない。4 おくゆかしい。5 譯もないことば。冗談。6 面目ないこと。

三二 1 人。2 手練の人達。名人。3 短い矢で近い所を射る者、兵術上の語。4 手は達者である意。5 翔鳥、空を飛ぶ鳥。6 城を攻めて乗込むこと。7 キンノシツキのダイセウ。金ののしのついた刀と脇差。8 評判する。9 年の若い者。10 將來見込のある若者。

三三 1 國家が危くて困難な場合。2 多くの勇士。世間一般の勇士。3 機先を制して敵を挫くやうな非常にすぐ

25頁

れた人。4敵のついて来るのをくじき防いで之を屈服せしめる智慧。5誠心を以て愛し教へるといふ實際の事。6少しも缺點のない國柄。7利害關係の最も深い事。(唇と齒、車と車にのせたものは、相俟つて用をなす故いふ) 8他のものより特にぬきんでて居る。9何れがよく何れが悪いかを誰が見わけることが出来るものか。10軽々しく他人の説に賛成すること。

三四 1公卿は攝政、關白、大臣(以上公)參議 大中納言及三位以上(以上卿)の人、又殿上人の總稱。太夫は五位の稱。公卿太夫は高位高官の人をいふ。2布衣は綿服、褌巾はくす布頭巾、共に支那の平民服。下賤の者を指す。3お目にかゝるの意。4評判。5朝廷。6幕府。7普く天の覆うて居る下の地。8海に沿うて居る土地。9古の正しい音楽は俗人にはわからない。高尚な言は俗人には解せられないとの喩。10互に黨派をつくり相結んで親みあふこと。11何のはたらきもなくて徒にその位に居り、何の功勞もなく徒にその祿を受けること。12大體同じで少しばかり異つて居ること。13盛に活動すること。

三五 1木匠、大工。2支那。3日本。4いふにはれない結構な手廻り道具。5植込み。6難義である。なやましい。こゝは、目ざはりでないやな氣持のするをいふ。7一時の間にやけてしまふの意。8見るが早いか。見るとすぐ。9土産。10僅の間。11神佛の加護。12何の條件もつかぬことをいふ語。對立するものゝない事。13或條件の下にいふ事。その物以外に對立するものゝある事。

26頁

三六 1さうは思はない。2かういふ譯だからかうだ。3なす事もなく退屈なこと。4不平のある友。5たはいもない話。6眞實心のある友。7マコトに。8親子兄弟を愛する私情。9さうはいふものゝ。10ことこのさまの何れが大で何れが小なるか。11いふことゝする事のとさき。12死後。13蓮府は晋の王儉の故事によりて大臣

の邸又は大臣の位をいひ、枕門は支那の朝廷で階前に枕櫛を植ゑ三公は之に向つて座したので同じく大臣のことをいふ。14ネハン。迷をはなれ悟を開いて生死を超越すること。15佛に手向ける水。16著作に誤の多いこと。17彼是の説を取捨して適當な所をとること。

三七 1いふことの條理。2明白。3圓い事。4どうして。5いひ争ふ。6残念がる。7注意する。8つまらない

三八 1客人。2間違つたいひ方。3あきれる。4下品。5その通りである。6豫期して居た事。

三九 1所置。2種々。3未熟。4前後。5却つて。6非常な間違。7剛健。8箱。

四〇 1祇園は寺の名、精舎は修行の道場即ち寺。2二本づゝ四方に立つて、釋迦入滅の時枯れたといふ。3玉の響く音。文のよい調子を形容した語。4すら／＼としてうるはしいこと。5いたましくあはれなこと。6高殿。7うつり變りの烈しいこと。有爲は生滅無常なこと。三界輪廻の境界。8急變の喩。9現實よりかけはなれた思想。10そつくりそのまゝ。11演戲の脚本。12なりゆきのありさまの變化の多いこと。13主要なる人物。14里々檀家のこと。寺は檀家から布施を貰う管であるのに、檀家が却つて寺から施を受ける意で、物事の逆である喩。15あきれる程である、なさない等の意。16運がよくて榮えること。17聞きながひ、18植込み、又草木を植込んだ庭園。19精神をこめ餘念なく道を修めること、轉じて肉類を食はぬことにもいふ。20アゲマキ。髪を左右にわけて結んだ子供の髪の方。轉じて子供の事。

四一 1セウサウトウ。小せりあひ。2ダンマツマ。死際、最期。3クロフネ。外國船。4役人。5キフセン。一つにあつまるさま。6フウビ。風に草木のなびく如く勢になびき従はせること。7ケツカ。朝廷。8學問の敷を盛にする。6リウウン。盛になるなりゆき。10神武天皇が始めて國を起された大業。11ミイツ。天皇の御

威光。12 士農工商何れも同様に開けた世のめぐみを受ける。10 鉛版は組みあげた活字を紙型にとり、之に鉛を鑄込んで作ったもの。活字は活字金。

32

四二 1 舟をつなぎとめること。2 船のうつばり。3 あはれみの心。

四三 1 御子孫。2 青い空のはて。3 海潮の沫の流れで止まるはて。4 最上最極の希望。5 愛する。6 心の劣つた人。7 庭にひいた水。8 心のおもむき。有様。9 姿、様子。10 たぐひなく。11 各自銘々。12 眞の道。

四四 1 静かな夕方。2 御殿の内。3 御簾の端。4 おとなびて。5 おくゆかしい。6 様子。7 軽んじ申す。

四五 1 心のまがつた。2 口では人の氣に入るやうに甘い事をいつて居るけれども、心中には恐しい考を持つて居られる。3 漢の高祖の胸の廣いこと。4 魏の曹操の賢い策略。5 死後の幸福。6 神の御子孫、即ち皇室。

四六 1 世の中の風習。2 親に孝行でその意に逆はぬこと。3 出世をすること。4 賢明な人。5 顔をしかめる。6 自分の境遇に満足する。7 わざはひを拂ひのけるお守札のやうなものだらう。8 善をすゝめ惡をこらすこと。9 きづのない玉、轉じて事物の缺點のないこと。10 くみとること。事情を押しはかつてやること。

四七 1 無明煩惱の境界をはなれること。轉じて死ぬること。12 マビサン。濱邊の家。

四八 1 一族。2 親しい者。3 入れおく。

四九 1 戦争。2 わるいけらい。3 水火の苦に陥つた。4 宮中に於ける困難な事がなくなる。5 萬民が重税からのがれる。6 安堵する。7 なさけある政治。8 天の神様。

五〇 1 國法を守ることを、納税すること。兵役に服すること。2 武器甲冑をしとねとして死ぬる。3 差上げる。4 望多い未來を根ざす。5 仕方がない。6 時が過ぎる。7 テイ。様子。8 評議がきまる。9 健全なからだ。

34

五〇 1 えない仕事。2 明らかにする。3 サヤク。かぎ。こゝは手づるの意に喩へた。4 入浴する。5 センサク

にスギ。うがちすぎる。6 フタウフクツのシ。如何なる難事にもたわまず屈せぬ勇士。7 敵に後を見せて射られてはならぬとのいひぐさ。8 根本となる標準。9 國民の思想の最もまじりけのない最も立派なもの。10 物事に深く心をとめず見過すこと。11 リケンにキンテンす。利益を得べき權利を他と平等に得る。12 ビダイフタウ

下の勢力が強いと上のものが之をおさへる事が出来ないとの譬。13 シヤクシヤウギ。正しくない定規(標準)

14 いふことが眞心から出る。

五一 1 陰曆十月。2 少しも。3 訪れる。4 佛に水など手向ける棚。5 さうはいふもの。6 カウジ。7 撓むほどに。8 興がさめる。

五二 1 大勢の喩。2 曲つた坂路。3 城門。4 鹿の角のやうな荆棘の枝をたて籬を結び敵を防ぐ爲めのもの。5 重だつたしつかりしたもの。

39 五三 1 しようのないほど。2 情ない。3 志を現はす僅かのお禮。4 成功と失敗。5 不仕合せで立身出世する事が出来ぬのを歎くこと。6 無實の罪を清めること。7 名は自からそのもの、性質をいひあらはすこと。8 物事の長びきひまどること。9 公卿、三位以上及び四位の參議を含む。10 昇殿を許された者。五位以上及び六位の藏人。11 四等官の一、尉のこと。普通檢非違使の尉をいふ。12 あこがれること。13 つとめはたらいてあるもく

るみをたて、事をなすこと。14 地球を圍む大氣。15 煩惱情慾が盛なために心が亂れておちつかぬこと。16 僧衣

17 人に面會することを敬つていふ詞。

五四 1 佛教で午後八時をいふ。初夜の鐘とは初夜の勤行の爲に鳴らす鐘をいふ。2 文机。本をよむ机。3 意味

4 條々。5 際。場合。

五五 1 あやしまれるほどの。2 うつりかはり。3 おぼろにかすんだ。

五六 1 演劇脚本。2 時代の思想の傾向。3 相関係する。4 破れほころびる、こゝでは事件が突發する意。5 ひとりだち。6 大勢の者がわい／＼とさわぐこと。7 蛙や蟬の如くやかましくさわぐこと。8 區別。9 霧がかつて道がはつきりとわからぬのに。10 徒歩の人。11 揃ふ。12 高貴の人の見ること。13 問ひ合せ。14 受けること
42 15 主観以外に實際に存在すること。16 別々の具體的の概念の中から共通せる部分を抜き出し、それを綜合統一して更に一觀念をつくる心の働。17 別箇の觀念から、共通の部分抽出して構想した想念。18 六種の親、即ち父、母、兄弟、夫婦。19 書き役。20 興行場の主。21 同役。

五七 1 赤兒の聲。2 自分ではたらし自分で食ふこと。3 大恩。4 天皇。5 天皇の情深いみ心。6 ある目的を達する爲に設けられたもの。7 人民。8 幸。9 不平の心を懐いてわがまゝな事。10 徳を以て感化すること。11 世の中が亂れて人民がちり／＼になること。

53 五八 1 佛教で極めて短時間にいふ。2 佛道を修する人、又學問技藝に志す人。3 一寸考へるほどの時。

五九 1 學問又は技藝に到達又は熟練してゐるほど。2 ソンタク。人の心中をおしはかること。3 とりこし苦勞に積むと棟につかへるといふ義で。本の多いことをいふ。4 人物批評。5 規則や禮節のくだ／＼しいこと。6 きく人がおまを千人。7 牛に負はせると汗を流した家の内に積むと棟につかへるといふ義で。本の多いことをいふ。

六〇 1 衣板の略音。布帛を打つに用ひる木や石の板臺。又その音もいふ。こゝではその音をいふ。

六一 1 大した手柄。2 身分不相當の希望。3 自分で自分を危くする端緒。4 前者の失敗の例を後のいましめと

する。説苑「公乘不仁白、周書曰、前車覆、後車戒、蓋曰其危」とある。5 執る所。6 中に圓い孔があつて輪狀をなした平圓形の玉。7 タトへ。よしんば。8 缺點。9 間違つた事。

六二 1 學問がひろい。2 議論がすぐれて居る。3 國柄のすぐれた所をひらきあらはす。4 我が國と外國との區別。5 忠とか孝とかいふ人倫上の分際を正す。6 國家をなまめいとなむこと。7 思ふやうにならずして苦むこと。轆轤は車行の利ならざるさま。8 考、計畫。

六三 1 文字。2 ひととほり。3 尤な事。4 相應しない。5 理由がない。仕方がない。6 いやである、物憂い等の意。7 かはゆらしい。8 大抵、大方。9 強ひて、無理に。10 一途に。11 神佛の加護。12 覺悟の足らぬこと。油斷、おちど。13 おめみえ。14 エシヤク、うなづくこと。挨拶すること。

六四 1 鶯。2 田畑を耕し養蠶をする時節。3 朝早く家を出て夜に入つて歸るの意。4 よい／＼のほひの雨。

六五 1 敬ふ。2 活計、くらし。3 昨夜。4 死ぬる。5 賤しい。6 人同様の事。7 人同様の事。

六六 1 未來。2 人相見。3 財布の中に金のない意。4 ミタラシ。神社の前に置いてある身を淨める爲に用ひる水。5 カラメテ。城の裏門。6 ヤナグヒ。矢を入れて背に負ふ具。7 カウズカ。ものずき。8 センジ。任官の詔を上卿から下記に傳へること。9 カンカン。嚴正剛直の意。10 ケンヨ。物の始。

六七 1 ミソギ。六月三十日に行はれる大祓のことで、身の罪穢を淨める爲に河に行つて身を洗ふこと。2 リンウ。なが雨。3 集まる。4 サウサイ。箒で掃いたり水をそゝいだりすること。5 くもの葉。6 如何にうはへを飾つても、人は肺肝を見るやうに、人の腹の中に考へて居る事を見すかすものだ。7 かまきりが斧(前足をいふ)を打ちふつて大きな車の來るのを防がうとする意で、自分の微力を計らないで事をなす喻。8 神様が天か

七九 1 おもとして。

八〇 1 風。2 松風の音。3 やさしくて遠まわしであること。4 自然に出来あがつた歌の面白さ。5 仰ぎ尊ぶの情に堪へないやうにあらせる。

八一 1 多くの生物のめぐみ。2 莊子の語。明鏡と靜に澄んだ水。心體の虚明なるに喩へた語。3 心の純一篤實なること。4 ちらなふ。考へ定める。5 峰。6 名譽(辱は不名譽の意であるが、こゝは單に添へた語)7 物に執着せず。8 諸國を修行してあるること。

八二 1 こまかく面倒なこと。2 規則。3 ひきとめて自由にさせぬこと。4 わづかの間。5 うつかりしてをること。6 世のなりゆき。7 たゞよひ動く。8 ためなはず。9 渦中の中にまきこまれてめぐる。10 多衆が同一傾向を持つて居ること。11 よく了解すること。12 つまはじき排斥すること。13 舉動のゆつたりとして居ること。14 政治を行ふ所。鎌倉幕府の政令を出した所。室町幕府の政治をすべた所。15 シンシヤ。したしみ近くこと。16 ソトザマ。徳川時代に譜代大名に對していつた語。17 中古功臣權門の私有地。

八三 1 早朝。2 似つかはしい。ふさはしい。3 本意。4 そのまゝすぐに。5 定める。6 輕蔑する。7 變態する。8 むさくるし。9 身の罪穢を河に行つて淨めること。六月三十日に之を行ふ。10 高德の僧。11 ツキナ。鬼やらひ。12 密教で頂に香水を灌ぐ儀式。又墓に水をそぐこと。13 昔講書のおとで開いた宴會。

八四 1 えこひいき。2 すぢみち。

八五 1 徒黨にひき入れる。2 そこで。3 さらし首にする。

八六 1 ナラ。2 ガラン。寺。3 ダンナチ。且那と同じ。寺からその門徒をいふ語。4 イラカ。棟の瓦。5 ミツ

シ。佛などを安置する棚。6 アラはに。7 左衛門府の長官。8 きれいな下廻りの者。雑色は後世の仲間。9 聲高く先驅をさせる。10 一番上席に着く。11 公卿達。12 誠に亂雜。13 挨拶する。14 元服すること。15 月の枕詞。

八七 1 荒見川ともいふ。2 澤山。3 宮城。4 さもあること。尤なこと。5 祝ひの草。

八八 1 先代の天皇。2 國を開き外國と交際するといふ大御はかりごと。3 先祖のおさとしをつぎのべる。4 何時までも滅びない。法(憲法)。5 天皇の御事業を盛にする。6 昔にもないほどのすぐれた仕事。7 天皇のお徳が天下にかがやきわたる。8 御めぐみが遠い片田舎までうるほひわたる。9 あとをくちますこと。10 意外に見込みあるしるもの。11 こぼれさひはひ。12 悪くしひいふこと。13 人民。14 風になびくさま。15 陰曆四月。16 一軒の御堂。17 由緒ある様。18 いつもかわらず照して居る燈火。

八九 1 殺す。2 仕方がない。3 乳母。4 今の本妻腹(先妻の腹に生れたのに對していふ)。5 だます。6 注意して。7 悲しがらせないで。8 狭いほどに。

九〇 1 春先などにしとしと降つてよく物をうるほす雨。

九一 1 歴史家。2 新しく興つた朝廷。3 辨護の文を作る。4 筆をまげて事實通りに書かぬこと。5 さとる。6 心暗く。やましい。7 天命を全うしないで死ぬること。8 支那の地北は山多く馬で旅行し、南方は水多く船で旅行する。9 到る處旅行する。10 履は足駄。どこもかしこも遊びあるく。

九二 1 無理に。2 身分相應に。3 能くつとめるさま。4 出世する。5 この上ない。6 映る。7 躊躇する。8 理に叶つた。尤な9 六月三十日の大祓(既出)。10 夏の残り。11 却つて。

九四 1 全體。2 普通とは異つた新説。3 一度は。4 一途に。一向に。5 尤もだと。6 くやしい。7 不承知類。

8 缺點。9 無理に、強ひて。10 いひつづす。「けたん」は「消さん」と同じ。11 用意する。

九五 1 海藻を刈る。2 魚介をとり鹽をつくる事を生業とせる人。3 忙はしい。5 生業。5 むさくるしい。6 昔茅で屋根をふいた家。藁屋。7 奥ゆかしく。ここは見たいの意。8 俄に。9 行く意。10 伯夷叔齊が周の粟を食はずといつて隠れた山。11 昔の賢者。12 賢明であり喜良であり、一心に道を修め進んで居る有様を外貌にあらはしてはならぬ。13 一本の釣竿。14 周代では大師、大傳、大保。漢代では大司馬、大司徒、大司空。唐では大尉、司徒、司空。我國では大政大臣、左大臣、右大臣をいふ。

九六 1 秋の神が乗物を廻して歸り來るの意。秋になること。2 旅衣の袖。3 鋭利なやじり。4 往來する人。5 たより、ゆかり。6 世の變遷のあとがなやましく感ぜられる7 青貝や玉をはめこむ。8 金泥で描き黒漆をぬり。9 七寶は金、銀、瑠璃、瑪瑙、琥珀、珊瑚(經文により差異あり)莊嚴は盛でのごそかなこと。10 すべて。差別のないさま。11 風の吹くさま。12 經文を微妙な節で高唱するのが心悲しく感ずる。13 山川が昔の姿によくにて變らぬ意。依稀はさも似たる意。

九七 1 心の底の感情。2 めいめいの仲間同士。3 著し。よくわかる。

九八 1 道理の上から許す事の出来ない。2 諸侯の旗頭は力を以て事を行ひ、表面仁を以て行ふやうに見せかける。3 取り除く。4 父、祖父。5 それこれの區別づく。6 自分で自分の才智に満足しておごりたかぶるの心の中に。7 謙遜して己を空しうすること。

九九 1 陰曆九月。2 蚊いぶし。3 一方では。4 ここは和歌や俳句に作る道具をいふ。5 竹林の七隠士をいふ。6 止まぬ。7 すぐに8 慰みに書く。9 却つて。

一〇〇 1 毎夜く。2 玉で飾つた高樓。3 極めてすぐれた御身。4 あきれるばかりの。5 クチズサミ、ふと心に浮んだ詩歌を吟ずること。6 竹の杖。7 さざ波。

一〇一 1 山岳のすぐれて居るさま。2 廣く大きいさま。3 めづらしいながめ。4 うつとりとなること。

5 造化は天地自然の意と造物者といふ意がある。ここは後者。自然の奥底のながめに入りこむ。6 満月の曇りないのを。7 又となく。

一〇二 1 憤りなげくさま。2 故郷(孔子の生國魯をいふ) 3 大義は人倫上の大きな義理。名分は名によつて區別せられた人倫上の分際。4 大義名分のすたれたのを再び起きうとするのを、狂ふ大波の既に倒れたのを再びもとへかへさうとするにたとへたる句。5 さまよひあること。6 聖人の教はそれぞれ名分を立てて教ふる故いふ。7 つまづくさま。8 人を陥れて術中に陥れること。又目前の差に拘泥して大本の異同に注意せぬこと。狙公が猿に林檎を與へし故事による。9 あくまでいつて説き破ること。10 母方の親戚。11 懇意なこと。12 固く自説を守つて變通することを知らぬこと。13 なぐさめ。14 夜に日をついで行くこと。

一〇三 1 テンテイ、テンセツ。點を打つたやうにあちこちつらなること。2 難境の垂幕。3 御病氣。4 皇太子(安德) 5 御位につき給ふこと。6 互に仰山らしく取沙汰する。7 死ぬる時。8 不思議な有様。9 神佛などの權に化して人間とあらはれたもの。

一〇四 1 ちなみのない。2 學者。ものしり。

一〇五 1 瀧の如く流るる早瀬。2 鏡の如き。3 狭い。4 區別。5 つとめ勵む。6 氣がかりがない。7 佛に供へる水や花を置く棚。8 物しり顔にふるまふ。9 ととのへよそふ。10 昔宮中で定まつた公事のあつた集會をいひ

此の日天皇出御御宴を賜った。11養育する。保護する。12アツマヤ。四本柱を立てて四方へ葺きおろしにした質素な風流な家。13恐しい。むさくろしい。氣味がわるい。14ケンチ。あがりさがり。轉じて優劣の意。15クワシホコチタル。精妙な武器が澤山ある國の意で、日本の異様。

一〇六 1大した用事。2人の許。3氣にくはぬやうな時。4ネツタウ。人のこみあつて騒しいこと。5ゲンツク。一度僧となり又俗人にかへること。6豫て心に描く方法。又なしとげる見込。7シンシ。高低等しからぬさま。又入り交つて居るさま。8天子の御乗物。9ハタモト。大將の本陣を守る兵。又徳川時代に將軍直參の臣で、百俵以上、一萬石未満のもの。

一〇七 1九月九日のめでたい節句。2ありたけの金を出す。3出雲國。4酒飲の支度をする。5鮮魚。

一〇八 1坂田公時、渡邊綱、平季武、白井貞道。2重だつた者。3はかりごと。工夫。4眉をひそめて憂へること。5カンケン。寒いと暖いと、轉じて時候の挨拶。6ケンカク。しらべ明かにすること。7無能者をしりぞけ、能者の地位をのぼらすこと。8ハイトク。徳義にもとること。9うそいつはり。10うそいつはり。11その場をごまかすこと。12つかずはなれず、何れとも決定せずにぐづぐづして居ること。13(一〇二)参照。14何れとも決せずにぐづぐづすること。15事を明白に決しないで曖昧にして置くこと。模稜は左右相同じて辨別し難い四角な木。16ジャウタウ。常の仕方。17ダキ。いやしんですること。捨てて顧みないことが唾をすてるやうであるの意。

一〇九 1戦争。2前漢孝文帝の子孝王梁に封ぜられ兔園を作り多くの竹を植えた。その故事により「兔園」に用ひる。ここは後醍醐天皇の皇子懷良親王が尊氏の讒言により東國に下された事と云ふ。3幕府又は將軍の陣

屋。ここは前者。漢將軍周勃が細柳に屯して胡にそなへた故事による。4分不相應な大なる恩寵を蒙ること。5自分の分限を越えて上に對し無禮をすること。6天や山の如き高恩を蒙ること。7事のわけを申さう。8一同揃つて甲冑を着固めて居ること。9すべてで。10開戦の時互に箭矢を射合ふこと。11下のかくこそと對句になる。かやう又はこのやうにの意。12矢の當つた時に發するかけ聲。13退轉は退歩をいふ。ここではたゆむこと。14箭矢の略。鏃の一種、木で蕪著の根の如き形に作り、中空にし三個の穴をあけ、尻股をつけて射るもの。空中を飛ぶ時音をたてて響く。15身體が強い。16館。やかた。17嚴重に城壁など造り支度して。

一一〇 1廣く世にあらはす。2ひろげてはりのばす。盛にする。3天下。4日本帝國が天から命ぜられた役目5缺ける所なくみちそなはること。6すつかり根本からあらためること。7貧富の差のかけはなれて居る事を程よく調べて差異を少くする。8すばやく事をさせる。

一一一 1全く。2鹽をやくために用ひる海草。ここは「かく」の序詞。3山は添へた語。禁中の大庭。内裡。4午前八時。5たのみ甲斐がない。あきれ程である。驚くばかりである。みすばらしい。6有様。

一二二 1尤もらしく。2不確にいふ。3端々。4名譽。5争はない。6儒學の書。7古言の意義の説明。わけ8國家を總理し人民を濟くふ意。9ふるいやり方をうけつぐこと。10公(攝政關白大臣)卿(三位以上及び四位參議)11區別。12酒宴。13ダンガイ。罪状をあげきしらべること。14ダケフ。双方でゆづり合ひ話をまとめること。15皇太子。16品評。17乳母、又は傳。18「ああ餘り非道い」「ああ物憂いことだ」「ああいやなことだ」等の意。10盃中の酒をのみほすこと。

一二三 1陰曆六月。2歎く。3よそから見て臭ゆかしくさうありたいと思ふ4つとめ勵む。5この上ない。

- 6 忠實。7 友にはぐれた千鳥。8 何とはなしに。
- 一一四 1 そしたりほめたり、ほめたりおとしたりすること。2 つまらぬ。いふに足らぬ。3 批評。4 ジキン自ら誇る。5 思ふことを少しもかくさずいふ。
- 一一五 1 未熟。2 器用ではあるがそれを専門としてゐない人。即ち素人。3 大概は。
- 一一六 1 佛道に入つた人をいふ。2 天下の政治。3 與る。關係する。4 心のさま。5 正氣がなく、氣狂じみて
- 6 闘犬。7 農夫が耕作の勞を慰めるために演じた滑稽な技。鎌倉時代から室町時代にかけて行はれた。8 性癖。9 一般の人。10 是認する。
- 一二七 1 初旬の七日。月始の七日。2 何ともしようがなく。3 意地わるく。4 昔の事(後鳥羽院の事を指す)
- 5 緒。6 人がしたのでない意。7 いふまでもない。8 將軍の尊稱。9 竹綠。10 ゲス。自分のいやしい者。11 ゲジャウ。乗物から下りること。乗打を禁ずること。12 神に祈つて罪穢などはらひますること。13 公卿衆(堂上は四位以上の昇殿を許された公卿)。14 人の靈魂が肉體と共に死せずして他の肉體に移つて行くこと。死にかはり生きかはりすること。15 まちがつた事。不正な事。16 陰曆七月。
- 一一八 1 いやしく無風流になつてしまふ。2 竹林の外やまがきのそば。3 龍の臥したやうな姿。6 たそがれ。5 どこから來るのかわからぬ香。6 大なるながめ。さかんなながめ。7 春の來たといふしらせ。8 紅の桃花。白い李スモモの花。9 静で心になふたさま。10 徳川初期の國學者。11 加藤千蔭。徳川中期の歌人。12 市中の塵がなさまり、無風流な俗人が去つて了つて。13 静でひっそりしてさびしいこと。
- 一一九 1 先頃。2 手廻り道具。3 思ふことと齟齬する中に。4 甚だしく。5 不満足である。6 歎ずる。7 夜具
- 一二〇 1 情ないことよ。2 愛育する。保護する。3 戦亂を風塵といふ。そこで兵亂のないことをいつた語。

4 人の心の善悪が外見丈ではわからぬ事を、鳥の雌雄の見分け難いのに譬へた語。5 やけくそになること。6 よい事は世間に知れにくい。7 弟子の師よりまさつて居ることの譬。

一二一 1 前世の報。又幸。2 なりふり容姿。3 氣轉。

一二二 1 感じて起つた思想。2 一般に。3 萩、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、朝顔。(現在は朝顔の代りに桔槔を數へる) 4 かなしくいたましい。5 自己又は意識に觀察せらるる一切の外物。6 かかづらはる。7 すがた外形。8 時々のながめ。9 よいたとへ。

一二三 1 峰の上。2 集る。3 ひっそりと静まるさま。

一二四 1 終日春の景色を探しあるいて遂に春の景色を見なかつた。草鞋をはいて雲の柵引いて居る畑のあたりを、至る所歩きまはつた。さて家に歸つて來て梅の花をひねつてかぐと、春景は梅の枝にもう十分である。2 高尚で容易にわからぬこと。3 手近でよくわかり易いこと。4 事情。5 十分にいひあらはす。6 よく實際を穿つた奇抜な句。(譬句は詞が簡潔で鋭く實際を表現して居る條件が必要である)。7 人物批評。8 人相書によつて所在不明の人をさがすこと。9 天子の御事業。10 サキモリ、上古筑紫の海岸を守備した兵士をいふ。11 天皇の御膳部。12 頭上に一本の針をさすの義で、人の急所をとらへて痛切な戒を加へること。13 自分の思ふままをそのまま行つて禮儀を省みぬこと。

一二五 1 書物。2 歳の餘りなる冬、時の餘りなる雨の日、日の餘りなる夜をいふ。之を讀書する時とした。3 心がねぢけゆがんで居る。4 この位のささいなこと。

一二六 1 人の感興をひきおこすべき状態。2 ただす。3 そだてる。やしなふ。4 ゆたかに。5 青い色。6 まじ

「はる。7 みちふさがる。8 ゆれて居る影は千尺もある龍蛇の動くやうである。9 なみなみの者。10 シュンバウ極めてすぐれた人。11 思ふ所をのべること。12 ききあはせること。13 いひふらすこと。14 サクキ。不運つづき。15 キユウソダイ。貧乏書生。16 互に相より相たすける譬。左傳の語。17 多ければ多いほど取さはきすること。漢書に見ゆ。18 シヤクナマゲ、ジンナノブ。小を屈して大を述べること。孟子に出づ。19 天下の憂に先立ちて憂へ、天下の樂に後れて樂しむこと。即ち志士仁人の國家に對する心。

二二七 1 尤もらしい。2 氣がかりであるさ。3 ましての音便。4 雲煙萬里。5 わけもなくいふうそ。6 氣がおふさぎになる。7 下され物。8 事をはぶく。簡略にする。9 寵愛する。10 袈裟を應器と。よつて佛家で法を傳へることを「衣鉢を傳ふ」といひ、轉じて、學問技藝でもその妙技を師より弟子に傳へるをいふ。11 すぐれたもの。特に駿馬をいふ。12 フセセイ。伏兵。13 アフリヤウ。押へて無理にとること。14 クソクシヤク。老いて益々盛なこと。

二二八 1 お好になる。2 幣帛。3 神主。4 貞觀は唐の太宗の時の年號。太宗蝗を吞んで蝗の災をとどめた故事。5 非常なものずき。6 残念だと思つて。7 手紙をひらいて人に告げる義。發表する。

二二九 1 行かうとする者。2 仔細はわけ。仔細を存ずは異存を抱く意。3 早速。4 御命令。5 退出する。6 自己の品位を保ち、自己の行爲を慎むこと。7 公人としての生涯。即ち公職にある期間。8 或物事を成就せしめる目的で多人數が同盟をした會合。9 一部にかたよらず廣く見渡すこと。10 ヌワツウ。滞なく通ること。又物を彼是にかよはして用ゐること。11 カクタン。たんをはくこと。12 チクセキとよむ時はたくはへ積むこと。チクシとよみ時は蓄へた物の意。13 ムザフサ。骨折らぬこと。手間取らぬこと。14 キイサエタクサフツ。さら

思召して下さいの意。

一三〇 1 世の中の事がわかるやうになるならば。2 号人の子は父が堅い幹角をため一弓を造るのを見て軟かな柳條をまげて箕を製し、治工の子は父が堅き金鐵をとかし破器をつくらふのを見て、軟かな獸皮を補綴して箕を製すといふ意で、父祖の業をつぐことを箕業を繼ぐといふ。3 乳母。(又傳) 4 こんな風であらう。

一三一 1 歌に就いての物語。2 不本意。3 すぐれて居る。4 笑止千萬。

一三二 1 つちのえうし。2 年號を改めること。3 皇后又は中宮などの冊立の前に内裏に入り給ふこと。4 親王や三公の女の入内あつてまだ皇后の宣下をうけ給はぬ間の稱。5 皇后に冊立せられ給ふこと。6 評判。7 世繼8 心だて。9 執政の臣。10 流しものになる。11 冠と袴とをつけて一人前の男子となること。12 天皇の命を上卿より外記に傳へること。13 お殺されになる。

一三三 1 目さめて居る時の状態をいふ。2 返答する。3 排斥する。4 人の氣に入られようとする。5 安らかにも寝られない。6 重々しく。7 人をなれ親しませない。8 遠慮をもされる。6 非常に親密に親しまれる。10 ナニツ。むせびなく。11 シンイ。怒つて人を怨みにくむこと。12 スキセン。よだれをながすこと。轉じてそのものを欲しがること。13 ジュンシヤク。高僧などの諸所を巡歴すること。14 キシヤウモン。違約せぬことを神佛に誓つて書いた證書。15 繪のしたぎき。16 府縣知事の異稱。17 儂は二石、石は一石、よつて少量の儲の意。18 事を爲し始めては中止すべからざることを、虎にのりて中途で下る能はざることに喩へた語。19 クウコクノキヨウオン。空谷に人の足音を聞く如く、寂しい時に人の來りしうれしさを喩へた語。20 キキ。いみさけること。21 シュクコツ。たちまち。22 ヘイカウ。こびへつらひて愛を得る者。23 タンラン。財を惜み食を惜むこと。む

まぼること。25タクキヨブレウ。配所に於てすることもなくさびしいこと。ランルレイシ。ぼろと玄米食。まづしい暮し。

一三四 キンテイ。君主の自ら定め給へること。2シマ。事情をおしはかること。3ヒキウ。武士。4ツザン。文字の誤の多いこと。5コウケイ。すぢのつけね。轉じて急所の意。6シシユク。その人に親炙せずして私によしとして學ぶこと。7クワクシヤク。老年であつて、元氣のあること。8キヨハク。大指。轉じて、其社會で頭立てるもの。かしら。9ケンチ。上下。優劣。10ハクビ。蜀の馬氏の五人の兄弟中長兄が最もすぐれ。肩が白かつたといふ故事により、多くの中で傑出せる者をいふ。11大した。12精華につく家柄で、大臣に上り得べき家柄。13正道を行ふ臣。14ザンネイ。言を以て人を陥れ又へつらふやうなわるいなかま。15人から非難される程の悪事。16あなた。17徒黨に引き入れられて、18先祖代々の立派な名譽、19禁中を警衛する武士。こは警固の武士をいふ。20(天皇がぬけ出でようとして居られる)御様子をうすうす知つて。21天皇に従ひ奉らうとして居るものはすべてしめし合せて。22うまく謀つて。23隠し伴ひ奉る。24人品や容貌。25品位の劣つて居る。26一步を譲つて無難作に壓倒せられる。

一三五 1如何なる場合にも無條件で存立する眞理。2社會の人を教導する人。木鐸は古支那で政令を布く時鳴らした金口木舌の具。3己の思ふままに行つて禮を顧みぬこと。4ゲダツ。三界の苦を解し脱すること。迷を開き道を悟ること。5シゲトウのユミ。一寸ばかりづつ籐を巻いた弓。6道理。7喰んど。8書物。9満足する。面白く思ふ。10ホヒツ。天皇を輔けて政治を行ふこと。11將軍の身で敵國の侮をふせぐ臣、即ち武臣。12鹽谷判官高貞の献じた馬に就いて天皇の失政を諫めたこと。13憚らず思ふままをいふ事。14朝日の下に鳴いて

居る鳳凰といふ義で、諫言の立派であつたことを喩へた語。15もとへかへすこと。

一三六 1手びき、案内。2法則。規則。3承認する。4散り難い。5便利のよい所。6春夏秋冬。7心を慰める。一三七 1その隠見出没する様子が人智を以て測り知る能はざる位であること。2タンゲイ。始と終と「端倪する能はず」は本末始終がわからぬ意。即ち物事に就いて容易に測り知ることが出来ない意。

一三八 1みだりに。2はつきりと。3本當に道をきはめた人。4實際の事實又は状態のあらはれて居る世界。經驗の範圍。5一寸の間にも常にうつりかはること。6ぬき出でて高きさま。7精神界。8獨立して思考し行動し得る個體。又精神の統一を持續して意識的行動をなし、道德上の責任をも受け得られる資格ある個體。9自然。神。10一かたまりの肉。

一三九 1顯教密教。天臺と眞嚴。後三條天皇の時置かれた役所で、當時は主に莊園の地券のとりにしらべを掌る所であつたが、後世には土地に關する一切の裁判をも司らしめられた。3醍醐、村上兩帝の時の年號。4天下の政治をとる權力。5をさめ給ふ。

一四〇 1拙い。まづい。2つまらない。3事痛くの義。仰山に。4存命中に。5しばらくづつ間を置いて。6枯生。芝の枯れた所。7得意風に。8集る。

一四一 1すぐさま。2様子が變でも。3速に(來よ)。4糊ばなれのして居る。5銚子。酒を盛る器。6たべる。ここは飲む意。7淋しい。8然るべきもの。ここは酒の肴。9紙燭に火をつけて。10すみずみ。

一四二 1尊い人。2著述する。3卒爾な振舞。4説。5深く通じて居る人。6ハナイカダ。花が水の一面に散つゐるのを筏と見たてていふ語。7奥ゆかしい。8カモリ、カモン。宮中の掃除など掌る役。9身分不相應。

10 田舎詞。方言。

一四三 1 元和は後水尾天皇の時の年號「僞武」武器を僞せる意で、天下の太平に歸すること。2 書籍がちりうせること。3 戦亂の場所。4 珍しい道具。5 チカからむ。その様子をおほよそ知ることが出来よう。6 シリョシウサウ。考が普く行届いて居ること。7 極めて荒々しいこと。8 盛んな御時代に世の開け進んだことを樂しませる。9 あつめること。10 種々の事を計畫をたてをさめいとなむこと。11 或定まつて居る高尚な目的。12 事柄の前例を證として。13 舊態から新態にうつる途中の時代。14 きまりよくまとめておちつけること。15 それとなく知らせること。

一四四 1 鐵瓶の沸く音を松風の音といふ。ここは茶の湯を沸すこと。2 満足すること。愉快なこと。3 似つかはしい。4 風流心。5 起居動作。6 少しも。7 法式に違へまい。8 かほつき。9 甚だ笑止千萬。10 簡略にする。11 競争し合ふ。12 うるさい。忌むべきだ。

一四五 1 十分に。2 或人。成長して一人前となつた人。3 却つて。4 馬鹿にする。5 あきれる。6 物事に情趣の人情。7 主として。8 却て害になる。9 フクヘキ。再び帝位につくこと。10 たしかなこと。11 すきこのみ。はやり。12 セツシャウ、敵の來るのをくじきとめること。國際上の談判。13 徳川氏が將軍となるより前から臣下であつたもの。14 ホンチス井ヂヤク。日本の神は佛が我が國に跡を垂れたのであると説いて居る。そこで本體たる佛を本地、化身して我が國の神となることを垂跡といふ。

一四六 1 他を自己と同性質のものとするはたらしき。2 たくみななるわざ。又美を形象に表現すること。又その手段。3 極めて短時間をいふ。4 實際の事實又は状態。5 別世界。6 サクサク。名聲の高きさま。7 シンシ。心

が直しくて敢爲の氣象に富むこと。8 スキタフ金錢の出し入れ。9 カウナ。すききらひ。10 ナツイン。印をおすこと。

一四七 1 農業。2 糸をつむぐこと。3 人たる道の根本。4 自然の時に順ひてなし又土地の便利に従つてなす。5 商賣をして有無相通ずるの利をはかる。6 ゆきて。7 武を第一とし文を第二とする。8 人民に租税を重く課すること。9 イヘツト。家への土産。10 カンダチメ(カンダチベ)公卿。11 普通の人よりも早く道を覺つた人。12 サンマイ。心を一事に集注して亂さぬこと。13 なほざり。14 クゴ。天下の御膳。15 ザウケイ。學問や技藝に到達して居る程度。16 ケフザ。そそのかすこと。おだていざなふこと。17 フェン。引きのばすこと。18 玉をぬく緒。轉じて玉を魂にかけ命をいふ。

一四八 1 當世風に裝束を着かへる。2 道中。3 有様。4 かやうのさま、即ち遺流の御幸。5 尊い。國君。

一四九 1 用もない人。「すずろ」は「そぞろ」と同じ。漫然の意。2 人の居る様子を妨げられない。3 得意さうに。4 澤山の念慮。5 人柄。やうす。6 いかめしく立派。7 やさしくていきなこと。8 安らかで行届いて居ること。9 起居動作。10 規はぶんまはし。矩はさしがね、規則、方則。11 さつぱりとして胸中のかかりとひらけて居るさま。12 いつはりのない愛とてあつてまじめなこと。13 えらくすぐれて居て物の役にたつこと。14 事をなすにま心をこめてし親切であり、心がゆつたりとして穩かであること。15 心中がはつきりとして情深く道理に明らかなこと。

一五〇 1 海面。2 片よせて。3 廊下。4 ほんの形式丈で簡略に出來て居る。5 諸の場合。諸の事物をいふ。6 シュクコツ。忽ち、極めて短時間。7 ムレウ(ブレウ)さびしいこと。退屈なこと。8 シンカウ。神佛を信じ之

にたよること。9ツザン。著作又は議論に誤の多いこと。

一五一 1家の内に閉ぢこもる。2歌の前がき。3しやれかうべ。4塙にかへる鳥。5ものすごくてきびしいこと。6大雨がざあと降るさま。7一人さびしく。8荆棘の如く亂れた髪。9あを白。

一五二 1さける事の出来ぬ別。2天皇の御齡。3人よりひいでてたけく、つよくすぐれて居ること。4天皇を輔佐して天下の政治を行ふ良臣が思ふ所を腹藏なく天皇のお耳に入れて、5圓満で情深く、ゆつたりとしてやはらかな天皇の御徳。6霜の如く厳しく日光の如く烈しいおごそかな御様子。7天皇の御怒を蒙る。8正しいことを憚らず申上げて極力おいさめする9おかし。くて物事に明かなこと。11夕立雨の後のうらかな風と清らかに晴れた月。

一五三 1黙する。2無益。3浮説。信ずるに足らぬはさ。4缺點。害。5恐し。むさくるしい。6辯論。7おしはかること。8よみ合せてしらべること。9衆中のすぐれた者。

一五四 1無理に。2反對して非難する。3一途に。4けなす。5偏屈なこと。6澤山の中に。7一般に。8やさしくて上品。9ごつごつした。10支那風。11なげかはしい。12はかなし。13もつたいなし。14によさいなし。15かぶきもん。16やぶさめ。17ふらちもの。

一五五 1一生不仕合。2身の程。3鶯。4きりぎりす。5風上の風の吹く方向に順うて鈴をふる。6重いもの。7十粒の黍を鍋、八粒を鍋とした。そこで極めて少量の意。8その昔、その當時。9朝廷10清くさつぱりとして慾が少い。11おとなしくて人情にあつこと12謙遜でおだやかで人と争はない。13こびない。14春夏秋冬共に。15袴の布は白い故、轉じて白色をいふ。

一五六 1世をなげき憤ること。2ゆつたりとおちついて居ること。3なりふり。身構へ。4名高い。5石の重つて並んで居るさま。6獸のやうにうづくまつて居ること。7釣糸。8ヨウカイ。9ゲダツ。10アンバイ(ニンバイ)。11トウアン。12ムシカゴ。13ゲンゾク。14チャウチャク。15チンニフ。16テキメン。17ツツラ。

一五七 1春夏秋冬。2並びなく。此上なく。3頑固な人。偏屈な人。4みだりに。5身分の卑い木樵。6假定の上に立つて、特殊な現象の原理に關し、概括して系統的に論述し證明せる學。7加茂眞淵8ひつそりと、靜かなさま。9以ての外のひがごと。10天皇。11ユフヤケ。

一五八 1天地四方と古往近來と、空間と時間と。轉じて空中又は世界。2何の條件も附隨せぬ規則。

一五九 1真心の苛責に苦しめられる。2謹慎して行く。3心だて。4船中でねること。5つらい。6苫屋根の下にねること。7終日終夜8あまり劣らない。9讀經や布施などして死者の追善を營むこと。10却つて悪いだらふ。

一六〇 1俳句を作る人。2後より進み行く人。後輩。3人を導き教ふること。啓發は智識をひろくこと。4極めて親切にねんごろなこと。5ほこる。6海をわたりて外國に行くこと。7人生の履行すべき道義。三綱五常の略。8人生の名分、人生の道義みち、のり。9獄卒を狼にたとへた語。

一六一 1山水の景色の面白さ。2うかれ出る。3すぐに。

一六二 1辯舌。2心の中の思をのべる。3一本の筆。文字で書く意。4おくぶかいかすかなおもひ。5駿馬。6支那の聖天子の名。7ケタイチキ形象を具有せるさま。又個體そのまゝを寫象するさまにいふ語。8チヨヘウにアふる。紙の表に十分みちて居る。9アカクコウかつこうのわるいこと。10つまる所。11オボツカなし判

然しない。心もとない。

一六三 1 破りする。2 さうするとも。3 京のならばし。4 かどで。旅立。5 せき。6 所用の季節のまぎはに賣るもの。

一六四 1 始めでかざりのないこと。2 すぐ。3 人情を残らずあらはす。4 残りがない。5 位置伎倆の殆んど追ひつくこと。6 一層すぐれて居る。7 天地自然の奥深い所に心をひそめて自然を讚美する。8 人生のさまざまの喜怒哀樂に浮沈する。9 さまよひある。10 人生を内面から見ると。11 性質感情の様々の變化。12 想像で美化する。

一六五 1 仕方なく。2 思ひなやむ。3 それでも(五月には降るだらう)。4 情なく降らなかつたから。5 朝廷。6 祈禱をさせられた。7 ミヤスドコロ。東宮妃、親王妃の敬稱。8 オンヤウジ。陰陽寮に屬し卜筮の事を掌つた者。占者。9 ビク。僧侶。10 セチエ。古朝廷で規定の公事ある日の集會。この時天皇群臣に宴を賜ふ。11 カラビツ。四本足の唐風の櫃。12 ヴリゴ。中にしきりのある辨當箱。13 もんじやく。14 或事に心をとめて忘れ得ぬ事。15 いき／＼とした氣分をあらはす。16 失敗に終ることを祈る。17 上奏文に勅許裁可を與へ給ふこと。18 双方の折合をつけること。和合の相談をまとめること。19 時代の要求に反する固陋の言動。20 同時間又は同人数で仕事をする能力の割合を増加すること。21 進んで物事をしようとする方針。

一六六 1 おくゆかしい。2 家への土産。3 様子、けしき。4 ありさま。5 はんばである。あさましい。情ない。いやしい。6 いふにはれない。7 拘泥する。8 兎にも角にも。9 天皇。10 仕官して居る位の身分の人。11 とけて一つになること。12 ごと／＼。13 養成すること。14 統一なく入りまじつてゐるといふ面白からぬ所。15

經過の道筋。16 さきること。17 抵當。こゝでは證據位の意。18 建築物の宏壯美觀なこと。19 詩文などの一字一句を下して全篇がそのために生動することの譬。20 なほざりにする。21 このやうな事情。22 世情によく通じて居る。22 人のあとにつく。人より劣る。

一六七 1 左右にわけた髪を結うて居る幼子。2 さざ。3 天上にある靈魂。4 年の跡、文、手跡。5 平伏する。6 氣が、りである。心ぐらひ。7 養育する。8 論ずる。

一六八 1 神社。2 二神の靈のとゞまりたまふ地。3 念頭に置かない。4 力のあらん限り説くこと。5 城塞にせまり突撃すること。6 次第に馴らしてその事情に到達せしめること。7 心や行のよい方にかはること。8 たよりおとづれの手紙。やうす。有様。9 底まで貫きとほること。10 仲直りをさせること。仲裁すること。11 さきがけ。

一六九 1 石は奥深い趣があり。2 苔は緑色。3 玉の音の形容。4 そ、ぐ。5 十分に胸の裡のゆつたりとして居ること。6 風雨に曝されて苦しめられること。7 ひつそりとしてさびしく静かなこと。8 朝は早くから夜はおそくまで一生懸命にはげむこと。

一七〇 1 光陰、年月。2 光陰の經過することの早いこと。3 早いさま。4 少しでも。5 老年になつて耳鳴がすること。6 散り易い櫻。尙上の心をうけて、心のむだといひかけた。

一七一 1 暗記する。2 旅の思。3 故郷。4 同じ感情の心。仲よい友をいふ。5 瓦や小石。無價値なもの、譬

一七二 1 自分の専門以外の道の人の席上。2 よそごと、しては見ますまい。3 誠に。4 人と争はないのがよい。5 損。6 人品。7 澤山。8 愚にも見え。9 けなされる。

Handwritten signature or mark.

128

一七三 1 響應する。2 返禮する。3 初學者に解し易く書かれた書物。4 自分の心で他の心をおしはかること。5 とひはかること。6 寒いと暖いと。時候の挨拶。

一七四 1 氣が分別なくみだりに動いて正しい状態を失ふからだ。2 分別なく行動すること。3 ひろくゆつたりしたこと。4 危険を侵す喻。5 しつかりして少しも變らぬ節操。6 姿勢を正しくして泰然たるさまをいふ。垂紳は貴人の結ぶ大帯の餘を垂れること。正筋は束帯の時持つ手板を正しくすること。7 ものいふ聲と顔色。

129

七五 1 地方の國をいふ。2 ムジュン。3 ツザン。4 ソンタク。5 センサク。6 ラウダン。

一七六 1 流された所。2 この上もない詩を作るによい境遇。3 名譽と利益。4 あやふいこと。5 思ひはかる。6 嘆き歌ふこと。7 天與の性質。8 心のなやみ。9 諱言をするわるもの。10 自分の苦を訴へる所のない流され人。11 春は花開きて榮え、秋は葉落ちて衰へること。12 少しも。13 ひどく冷淡でなまけのないこと。14 國家社會がよく治まつて安らかなこと。15 ガフベン。共同出資して事業をなすこと。16 ナイコウ。うちわもめ。17 ハタン物事の失敗すること。18 ランシヤウ。物事のはじまり。19 ダケフ。双方の折合をつけること。20 ヒジュン。上奏文に勅許裁可を與へ給ふこと。21 ニクハク敵の城塞に迫ること。22 ムジンゾウ。數限りもなく多いこと。23 タカミクラ。天子の御座所。又帝位。

130

七七 1 なさなく。2 眞直に。3 何ともいへぬ美しい水。4 歩むにつれて水のはねあがるをいふ。5 二度天位におつきになること。6 天皇の御心。7 ものさびしいさま。8 寝て居て頭をあげて耳傾けること。9 唐の張繼が楓橋のほとりに泊つて「夜半鐘聲至客船」とよんだその詩を吟じて一層旅愁をそへられる。10 梁の孝王が宮室苑囿の遊びを好んだ事から起つた故事で、昔の宮園の御遊を思ひ出して涙を催し給ふの意。11 わるい役人がわ

がまいた振舞をすること。12 幕府の金穀を入れる庫がからになつた。13 すきをねらふ。14 腕を握り。15 眼をいからして奮激する。16 やすらかなさま。17 喜び笑ふさま。18 一度危急が間近にせまつて來る段になつて。19 驚くさま。20 大砲をつくる。21 命を失ふ。22 自分の才をつまみかくし又あとをくらまして行方不明となり。23 狂人のふりをして社會の目につかぬやうににげかくれる。24 馬の圖をしらべて之に依て駿馬を求めようとする如く、とても求められぬ譬。

131

七八 1 三十歳餘となつて了つた。2 七十歳八十歳まで生きたとしても。3 年が若い。4 ビンヅル。5 ニンニク。6 フゲン。7 チウザン。8 ボンナウ。9 セツナ。10 ベイゲイ。11 ルキシ。12 シセキ。13 ランル(ツツレ)

132

七九 1 朝日は他を犯すわけではないが。2 鎌倉幕府が莊園に置いた職で、徴兵、糧米の事、盜賊兇徒の追捕に任じた。3 莊園を支配する爲に朝廷から置かれた職。

133

八〇 1 責任が重い意。2 文明の光華。3 昔の賢者ののこした功績。4 後世まで残れる徳。5 本義、要義。6 日本。7 世界。大地。地は萬物を載せる輿の如しといふ義。8 あざやかな風致。風化は人を諷し導いて善に化せしめること。9 國の八方。天地。10 あてにして待つ。

八一 1 専ら。2 神典。古事記日本書紀をさす。3 汝。

八二 1 生れつき心廣くて物事にこせつかない。2 つい一寸。3 宿場。4 國をめぐるもの。5 やり。6 時節の御禮のもの。

八三 1 うつたへがましく。2 庭へひいた水。3 場所がせまい意で、雨雲がびつしりつんで落ちることをいふ

4 秋より冬にかけて吹く烈風。5 つらい意。6 亂暴。散り亂れて居ること。

- 一八四 1 當世風。2 わざとらしい。3 古書。4 興が乗らない。5 一樣同様。6 わけのわからない。
- 一八五 1 八月。2 跼天踏地。心に恐をいだき天地間に身の置き所なきさまをいふ。3 おそれる。
- 一八六 1 様子、けしき。2 色。3 ならぶべきものなくよいこと。4 しよぼくと降る。5 さうはいふもの。
- 6 區別。7 文の下書。8 老いてその物事に経験多き人。9 文字のかきかへ。文句のつくりかへ。10 はこのそこ
- 一八七 1 同じ仲間。2 一生涯を終へる。3 輝く。4 水邊。5 ひやく。6 朝廷。7 一年中春の如き楽しい状態。
- 8 草深い所。9 俄に起りたつこと。10 幕府。11 はげしいこと。12 變化。13 繪を主とし説明を加へられて巻物となつて居るもの。14 色彩の花やかなこと。
- 一八八 1 すぐさま。2 かほつき。3 思ひくらべる。

○一八九 1 貴人の奥方。2 貴人のお目にかゝる。3 上京。4 家臣、家來。5 滞在。6 關白の母。7 法。8 常規を逸せざる健全な識見又は思想。9 人間社會に關する知識を修養すること。10 眼目。11 ぜにさし。12 ばつとしてしまりのないこと。妄誕はとりとめのないこと。13 人が混雜して騒しく賑やかなこと。14 人と人と接觸する

- 15 或ものをこしらへ作るに就てのもくろみ。16 官吏の罪過を調べ訊して之を天皇に奏上すること。17 かどはかすこと。18 個々特殊の觀念内容を比較對照して、是等に共通な特性をぬき出して總合すること。19 舊態を脱して新態に移らうとするその中途の時代。
- 一九〇 1 四月晦日。2 五月。3 早朝。4 またとなく趣あるさま。5 非常に際立つて。6 郭公の縁あるもの。7 とりこ。8 まことに小さいいたいな小供。9 殺すも生かすも平家の自由であつた。10 つとめる。11 虎を野に放つ如く後の危害を招く原因をつくるやうなものだ。12 虎が眼を見張つて上を見るさま、轉じて他の隙をうか

がってその様子を見て居ること。13 關東八箇國の民。14 西の方に向つて行くと。嘯呼は虎の關係から出た語。

- 15 ふるひ動く。16 富士川で平家の軍が水鳥の羽音を源氏の襲來と誤解して潰走したことをいふ。17 ついえちる
- 一九一 1 翁の家。2 うすい酒。味のわるい酒。3 浮世をはなれた物語。4 御馳走する。
- 一九二 1 初心。2 うたがはしい。
- 一九三 1 二本の矢を手に挟み持つ。2 習ひ初の人。3 おこたり。4 人の道。5 或事を思ふ程の一寸の間。
- 一九四 1 缺點。2 皮相を撫でたばかりでその真相に至らぬこと。3 麗な言葉、つやつぱい言葉。4 尤もらしく満足する。6 得意顔をする。
- 一九五 1 印度にあつた祇園寺。2 一切の萬物は變遷流轉して定めないこと。3 沙羅は高遠の義。この木は二本宛八本四方に雙生して居て釋迦この木の下で入滅した時皆枯れたといふ。4 はかない譬。
- 一九六 1 新古今和歌集宮内卿の「うすくこき野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ」によつて書いた。2 おもむき。3 未熟な人。4 古今和歌集の序にある詞。5 いたはしい。6 惜むべきだ。
- 一九七 1 廣く遠いさま。2 ばつとしてとりとめないこと。3 天地。4 招待もせぬに來る客。5 差別上の我、小さな自我。6 自分の穴を守つて他に廣い世界のあることを知らぬ蟹の如く自我を張通すか、自分の巢を忘れて再び戻つて來ぬ鳥のやうに自分の立場をすてゝ了ふ。7 生産事業を振ひおこす。8 武士の道、戦の道。9 經世済民の意。10 他に後れてついて行く。11 生つき才能の乏しいこと。12 無益になえちゝかまり、しりごみすること。13 外觀の美を去つて實利を取る。
- 一九八 1 同盟國。2 すりけす。なくなるをいふ。3 まうける。4 生きて働いて居るうちに死がある。5 將來。

- 〇一九九 1 道なきとり物事の眞理を會得する。2 道理を實行するにすばやい性行の立派な人。3 エシヤク。挨拶すること。4 モハウ。似せること。まねること。5 シフチャク。深く思ひ込んで忘れ得ぬこと。6 ヘキトウ。まつさき。始。7 モノノゾ。道具、體。8 テウエツ。こえずぐれること。9 シヤラク。心の中のさつぱりとして居ること。10 シフシウ。ひろひをさめること。亂れたものをもとの形に正しくすること。11 クワウタウ。言説の捉へ所がないこと。あてごのない説。12 アンチユウヒヤク。人知れず活動すること。
- 二〇〇 1 きつぱりと。明白に。2 何事も思ふ通りにいつてのける事の出来ないこと。3 承諾して了ふ。4 貧乏で約束を果すことの出来ない人。5 思つて居る事を成遂げることが出来ないこと。6 東國の人。7 心のやさしさ。8 朴訥で愛嬌のないこと。9 殷富であること。10 人から信用される。
- 二〇一 1 自分の身にめぐつて來る天命。2 金錢などに對する慾望。3 名譽を愛する慾。4 自分の正直をみせびらかす。5 劉子新論に「獨り寢テ不_レ愧_レ衾_ニ」とある。獨り寢て居ても夜具に對してはづる所がない意で、人の見て居ない所でも恥しい行のないことの喩。6 孟子の所謂浩然の氣をいふ。即ちしつかりした道德をいふ。
- 二〇二 1 縁側に近い所などをいふ。2 火鉢。3 なぐさみ半分に灰をかく。4 女らしく。5 おろかな。6 仰山らしく書く。7 貧乏書生。8 一つに集ること。9 氣をはらしなぐさめる。10 私の心をあはれと見て見のがし（即ち見咎めないで）居て下さいよ。
- 二〇三 1 名譽利益を得ん爲に奔走する。2 「まづし」と同じ。手薄である。3 北斗星を支へる程澤山の金を積むをいふ。4 人の迷惑となる。5 つまらない。6 いやな。
- 二〇四 1 サナへ。2 ソシル。

二〇五 1 見る事の出来ないでまだ事が形にあらはれぬさま。2 未だ形にあらはれない前に。3 耳のよく聞えるもの。4 時々無心のもではあるけれども。5 賤しいもの、木樵。6 たき木。7 訪問。8 常緑の葛の一種。9 來る人と繰るとをいひかけて居る。

二〇六 1 煩惱世界即ち俗界の反對の境地。2 束縛をはらひのける。3 富豪の子。4 天子は兵車萬乗を有す。故に天子をいふ。5 名利の世の中をいふ。

二〇七 1 奥ゆかしい。2 不安である。心暗い。3 論ずる。4 現實心のないことをいふ。5 俗世間のならはし。6 唐の王維が詩に、「荆溪出白石、天寒紅葉稀、山路元無雨、空翠濕人衣。」による。空翠は山氣。7 和漢朗詠集の大江澄明の句に「山腹山何工削成青巖、水復水誰家染出碧潭之色。」とあるによる。

二〇八 1 天皇のめぐみが片田舎にまで及ぶ。2 手紙の來るのをまつ。3 大乘では迷妄を脱却して功德を圓成し不生不滅なる法身の眞證に歸するをいひ、小乗では三界の煩惱を斷滅して灰身無爲に歸するをいふ。4 生業をつとめはげむ。5 貴い人も賤しい人も。6 辨別し道理をたて、いふ。7 人から嘲笑される。8 銘々。9 比べる。10 何やかやととりあつめて。11 ほんのりと。

二〇九 1 驛路。2 はたご。3 よしんば。4 進歩發達をつとめること。5 いちじらしい。目立つ。6 大きくすぐれて居る男らしい心や盛な志を持つて居て。7 草むら、世に聞えないたとへ。8 見て、狭まいた簡。10 目前の利益を考へる上から。11 損得勘定の上から。

二一〇 1 幼い。2 愛兒。3 歎ずる。4 おしひるめる。5 萬人共通のものとする。6 うつらせる。7 自分一個の關係をはなれて觀察すること。8 うつつす。かへる。9 得心する。10 つかみとること。11 きみわるい。恐ろしい

12 飄。13 ぬのしし。14 人らしくて。15 うちすてる。

二二一 1 あゝ。2 ふがいなさま。3 未練なこと。4 無法な人。5 左馬頭義朝。6 自己の内部。7 絶えず感ぜらるゝさま。8 知覺を以て感得せられる世界。9 一瞬間毎にかはりゆくこと。10 ぬきんでゝ居るさま。11 精神界の空氣を呼吸し。12 人間として資格あるものゝ基礎。13 他に對立する條件のないこと。14 それ以外に對立する條件のあること。15 不用のものゝあらひ去ること、えりわけること。16 徳を以て人を感化すること。17 となりつけること。又聲を大にして邪説を排し眞理を説きあかすこと。18 いつてのけること。いひはること。19 かなりて臥すること。20 亂暴なこと。21 狭い意見。22 道理を十分に見ぬいたかんがへ。

二二二 1 なまじつか。2 そのやうな様子がない。3 論じあふ。4 氣がよりである。心暗い。5 昔溫明殿の別名八咫鏡を安置せられた所。轉じて八咫鏡をいふ。6 親王又は皇子をいふ。7 田の意。8 井の水。9 國家の政權をとる人。10 泰時ほどえらくはなかつたが數代つゞいた。11 戦場で勝敗を争ふ。12 文雅の道に心をよせる人。13 辯論を行うて優劣を争ふ。14 文章上。15 勝敗をきめる。16 人に負ける。17 新奇の工夫。18 一風異つた見をたてる、旗幟は旗じるし。19 世間の見るもの聞くものをおどろかす。20 小さい者のかしらとはなつても、大きなものゝあとにつくな。21 支那春秋戰國時代の六強國、即ち齊・楚・燕・趙・韓・魏。22 心の中を見抜く。

二二三 1 文學の内で、純粹の美的作品をいふ。2 俄に盛になること。3 心棒。原義は戸や車の回轉する中心をいふ。4 靴を隔てゝ痒きをかゝ感はなくなつたが。5 直接にかゆい所をかゝ氣持はせず、矢張物足りない感があつたとの意。6 首をあげて待ち望む意。7 作中の人物の言葉でなくて、著者自身の言葉の部分はいふ。8 家庭内のもめ。9 満足の出来る程。10 すぐれたもの。

二二四 1 うらみ歎く意。2 客人。3 かごかき。4 黒もじの木を染料にして染めた色。5 僧か俗人かの區別。6 裝束をして居た。7 公平な議論。8 同盟國。9 國內の事の心配。一九八参照。

二二五 1 一時代の社會の人を教へ導くこと。2 大蟻、蟬は小蟻。自分の力で及ばぬことを企てる譬。3 炎帝の女が東海に溺死して精衛といふ小鳥となり、西山の木石を啣み來つて、東海を填めようとしたといふ故事無謀の事を企てることの譬。4 民心を新にしてよくする。5 儒者の分限内のこと。6 かまはないで捨て置くこと。7 年寄つた先生や老儒者。8 仁・義・禮・智・信。9 俗人の耳をうれしがらせる。10 時代の人の人氣に投合する。11 曲解した學問をして世の俗人の人氣に投じようとする。阿はおもねる。

二二六 1 事實をのべ記した韻文。2 實際の事實又は状態。3 ひどく苦痛を感ずること。4 背後の光景。

二二七 1 不幸と幸とは繩の如く交互に來るの意。2 紅の皿。3 寶玉の一。4 西國八十八箇所を巡禮する旅人。5 池。6 一方では。

二二八 1 昔高貴の人の外出の時兵仗を帶して護衛した近衛の舍人。2 右近衛府に附屬した馬場。3 昔正月十八日に行はれた公事で、この日主上弓場殿に出御あらせられて、近衛府の舍人の弓射の競技が行はれる。4 人の見て居る面をいふ。5 不都合、困つた事。6 人望、世間の寵愛。

二二九 1 ぼんやりとして心の空しいさま。2 圭角又は缺陷のないさま。3 ぼんやりして居るさま。4 すぢ道の明かなさま。5 星。6 毛筋や絲。7 くばりあはせ。8 めぐり進むこと。9 いかづち。10 ゆつたりして居るさま。11 空。12 心のふさがるさま。13 しまりなくほしいままであること。14 うれしげなこと。15 ぬきんですぐれて居ること。16 氣分。17 おもひはかること。18 セウカン。宵衣盃食の略。夜のあけぬ内に衣を着、日が没して

後に夕食をとる意で、天子が政事にはげまれること。19ザウヒ。よしあし。20クワイシヤ。なますとやき肉。轉じて人の口に唱道せられること。21セツナ。瞬間。22ボクキヤウ、ごつごつしてかたいぢなこと。

二三〇 1 縁側。2 水ぶね。3 俗世間のけがらしい考。4 この上ないよい友達。5 ボンナウのキツナ。情慾願望の迷から生ずる束縛。6 ルテン。衆生が迷の爲に生死の界をはなれ得ぬこと。7 リンエ。靈魂が肉體と共に亡びないで、轉々他の肉體にうつつて、絶えず生死の境をめぐる。8 ゲダツ。迷をはなれ悟道に入つて自由自在であること。9 レイゴ。獄屋。10 イツサイシユジャウ。世上一切の生物。又は人類。11 かはる。12 寂滅は無明煩惱の境界を離れたること。轉じて死ぬること。寂滅爲樂は寂滅に到達して始めて眞樂ありといふ意。13 ネハン。迷妄をはれなて不生不滅の界に歸すること。

二三一 1 深入をして居ないさま。よく知つて居ないさま。2 返事。3 見苦しい。4 すぐれて居る。5 思ひつき考。6 キウサウ。玉や金の響。7 赤と青と。轉じて繪具をいふ。8 カンバス(畫布)をたてかけて置く臺。9 五色のきらびやかなこと。10 心をいふ。方寸は一寸四方。11 道德が衰へ人情が薄くなつて濁つて居る俗世間。12 一尺ほどの繪ぎぬ。

二三二 1 幸。2 あたりまへの人情。3 しつかりとせるさま。4 もてあそぶこと。5 自分で自分の身を大切にせぬこと。6 終局の大目的。7 天から賦興せられること。8 つとめはげむこと。

二三三 1 自分のわからぬことを目下の人になづねることを恥とは思はない。2 ひそんであらはれない勢力。3 靈感。感激。4 天真爛漫の狀をいふ。5 無用の言をつつしめば禍にかからないとの譬。

二三四 1 宗教を信ずること。ワ池の中央。3 天の中央。4 涙の分泌線。5 おちる。6 水すまし。

二三五 1 愚人。2 全く。3 經文に通じて居る法師。4 座禪によつて眞理を了解しようとする僧。5 自分の智識の範圍外のもの。6 未明。7 朝飯をかしぐ籠の烟。8 さわやかな気分。9 自分の占める位置。10 しめやか。11 心の底に湧く思。12 兩國の間にはさまつて居てその衝突の危険をゆるやかにする國。13 確固たる主義がなく唯勢力の強い者に従ふといふ思想。14 曲解した學問を唱へて世の人氣に投ずること。15 名高い寺。16 ちすぎ

二三六 1 儒者の仲間。2 太政大臣・左大臣・右大臣。又左右大臣と内大臣。3 吉備眞備。4 前例のない事。5 母方の親戚によつて得た權威。6 家柄。7 はびこること。8 一人の貧乏學者。9 評判、名譽。10 讒言をするわる者。11 君の明德をくまらず。12 國境、國のはて。13 官職をさげること。14 前と異つた境遇になる。15 死後の靈

16 不思議なこと。

二三七 1 陰曆九月。2 晩年、晩年の節操。3 變らぬ色。4 一般の花。5 みやびやか、上品。6 とりわけ。7 花のない時節に逢つて時を得たのをいふ。8 デモク。昔諸臣を官職に任せられた公事。縣召除目、京司の除目、臨時除目等がある。9 ヤゴロ。矢のとどく距離。10 エハツをツタふ。師僧が佛敎の妙義を弟子に傳へるをいひ轉じて學問技藝の奧義を弟子に傳へるをいふ。11 センシヤウ。先例。12 キクワをカふ。意外の禍にあふ。13 キシヤ。なぐさめたすけること。14 キヨハク。その社會でかしらだつもの、多くの人よりもすぐれて居る者。15 カツトウ。もめ。16 レンプクワイモン。大臣の異稱。17 シンシホシヤ。互に相より相たすけあふ關係にあること。

二三八 1 禍福は互に因果關係のあるものだといふ譬で、昔支那の邊塞に近い所に翁があつた。一日馬が逃げたその馬が胡國から其馬をつれ歸つた。翁の子之に乗つて落馬して不具となつた。併し事ありし際不具の爲に兵役を免れたといふ故事による。

- 二二九 1 春と秋とを見合わせる。2 麥の收穫時。3 満月。4 大晦日の見えぬ月。5 「こそあるなれ」の約。自分より先に死んで了つたのだな。6 心の本体。7 物の道理にくだらないこと。8 悪病神。
- 二三〇 1 禁門のどだい石。2 後宮。3 「故郷を焼野の原とかへりみて末も煙の波路をぞ行く。」と平家物語にあるのに據つた。4 さ迷ふ。5 中古高貴の人の常服で、紋と地とに差があつて大體袍と同じく烏帽子を着る。6 昔時の正装。下に赤の大口を穿き次第に表袴・單・靴・下襲・半臂・袍を着し石帯を結び、帯釧・平緒を用ひ冠靴をつけ笏を持つ。7 鎧。8 餘哀を残つたあはれ。忠度を初め一族の者に歌人が多かつた故かくいつた。9 かはせみの羽で蓋を飾つた旗で天子の肉薄をいふ。10 出帆する。11 波打ぎは。
- 二三一 1 卑近な。2 悪事が次第に増長するをいふ。3 分際。4 仰山な。5 石碑。6 却つて。7 初對面の客。8 病氣にことよせて。9 一なすりの雲の如く心を曇らせ。10 たへがたい悲。11 かげ。12 けす。
- 二三二 1 躊躇する。2 南朝方、後醍醐天皇方。3 美しいながめ。4 山のすがた。5 すさまじいこと。
- 二三三 1 おごりたかぶる。2 おだやかな人。3 身の程。4 高ぶる。5 仲間。6 かたいぢの性質。7 つやつやく美しいこと。8 もの靜かでしとやかなこと。9 まろくきづのない美しい玉。10 手入れたあと。11 みぎまきかけること。12 大膽に表現する方の才。13 古人の長所を取捨して適當な所をとつて歌ひ出す方の才。14 なげかはしくいたましい。15 一流をたてる。16 見識のなみなみでないこと。17 書物を澤山に目を通すこと。18 文化の事物。19 したしむこと。20 實際に經驗する。21 非常に深いこと。22 要點をにぎり正しく理解すること。
- 二三四 1 しみて。2 すべてに通じて。
- 二三五 1 古語の意義の説明。2 とびぬけてすぐれて居ること。3 一個の人格としての自己を實現すること。4

自然界の作用を超越して居ること。5 はやりうた。6 盛に働く。7 政權のうけわたしが兩方會見しての談判の間に。8 終をつげる。9 大勢。10 一般民衆が共同して事をなす時代。11 過去の夢。12 世の中がひろく一般にひらけたこと。

- 二三六 1 ためらふ。2 光。3 茜草アカネの根を粉にした暗黒色の染料で染めた色。4 半分ばかり。5 顔の上の澤山のほこり。6 たちまちに。7 俄におこるさま。8 融合する。9 まさる。10 幽玄。11 心中にうつるさまさまのこと。12 輝く星。13 うやまひつつしむこと。14 いましめさとす心が起る。15 天帝をまつる祭壇。
- 二三七 1 はりあひのない氣持。2 氣がせく。3 甚だしりえらい。4 日暮れ方。5 縁があつてめぐりあふこと。6 極樂淨土にあつて聲の美しいといはれて居る鳥の名。7 よりどころ、たより、ゆかり。8 粗末な絹。9 双物を打ちきたへる職人。10 生滅變化することなく常に存在すること。11 饗應の時主人から客への贈物。12 昔は庶人の服。後武家の正服となつた。方領カクエリで、袖括、菊綴、胸紐などがある。
- 二三八 1 センリウシ。飄刺を含めた十七字詩を作る人。柄井川柳の始めたもの。2 カラヤウ。字體が支那風であること。3 うけつぐこと。4 キズキ、氣まま。5 ハウラツ。酒食の爲に金錢を浪費するもの。6 インラク。みだりがはしいのしみ。7 イウゲイ。歌舞音曲等のおそび。8 コロイキをフウす。心のさまをあてこする。9 仕あげる。10 ミダリに。何の思慮分別もなく先祖の残した恩澤をうける。11 ヤヤもすれば、ごうかすると。12 カンキヤク。忘れること。13 ケイロ、ちかみち。通つて來た道筋。14 ツウヘイ。共通の弊害。
- 二三九 1 朝。2 風流心のない私。3 惜しく。4 この上なく。5 意外なこと。
- 二四〇 1 よくないこと。2 生涯。3 つまらなく。

- 二四一 1 かざりけのないこと。2 身分の高い者と低い者との間のきまり。3 油断すれば禍を招くとの譬。4 目前の損はしても大局の利益をとれ。5 あはてると却つておそくなる。6 敵國が破れると謀臣は不要となり、君から忌憚されて誅を蒙るをいふ。7 金持の人は物質的の慾に耽りやすく、信仰心が薄いことを譬へた句。
- 二四二 1 衰頹して了ふ。2 物のあや。色彩。3 上手なこと。4 單にその事丈いふ。5 すらすらと事の運ぶこと。6 わけもなく。7 ゆつくりと。8 つまらぬ長話。9 全く。
- 二四三 1 善行を積んだ結果として一門に幸福がうけられる丈うけてしまひ。2 悪行を積んだ結果として受ける不幸が身に來る。3 生れる前の世。4 飲んで飲む。5 前世。6 食客。かかりびと。7 先祖代々からうけついで家來。8 一家一門。9 恩澤。10 詩文を草すること。文筆業の日備かせぎ。11 衣冠は官人の禮服。
- 二四四 1 分け入る。2 露雨。3 山中の賤しい人の家。4 寺々。5 天地は前後撞着することばかり集つて居る所である。6 一定不變の大なる道。
- 二四五 1 右大將源頼朝。2 神社の前庭。3 手でかく輿。4 階段。ミハシとよむ。5 イガキ。神社の垣。6 並の人。7 輿の側について居る若い武士。8 お目をおとやめなまつたぞ。9 思ひもかけぬこと。10 僧の所定めず行脚すること。轉じて僧をいふ。11 アリカ。居る所。12 昔王が狩に出かけて穴熊といふ猛獸でなくて賢人を得たといふ例に従つて。
- 二四六 1 代々受け傳へた長い間のしきたり。2 手本。3 さながら。4 大なるわるもの。5 權勢利益を追ふもの。6 ソウコシヤ。文人。7 ソンタク。他人の心中をおしはかること。8 クワウジツビキウ。時を空費することの長く久しいこと。9 タマのチ。命。10 ダンマツマ。死際。11 トコヤミ。永久に闇黒であること。12 バクギヤカ

- よく心のあつた友。13 チャウシユウシヤリウ。公卿をいやしんだ語。14 ホイ。狩衣の一種。又無位無官の人。
- 15 ノレン。店頭などにさげる日よけのとばり。16 シニス。綾織物の名。17 チャブダイ。食卓。18 キツキヤウ。びつくりすること。19 アルタ。遊戯用の札。20 マンチャク。ごまかすこと。21 ヤユ。からかふこと。22 クワンキ。空氣を入れかへること。23 カシドコロ。宮中の皇祖皇宗を祀り神鏡を安置し給ふ御殿。
- 二四七 1 一切萬物の生死流轉する三つの世界、即ち慾界・色界・無色界。2 七つの珍らしい寶。3 つまらぬ。しかたがない。4 美しい大きな家をいふ。5 浮世の名利を貪るけがららしい慾望に執着するのを氣の毒に思ふ。6 静かな生活の氣持。7 天皇の御心。8 社會公衆の爲につくすこと。9 生活する爲の業務。10 人を養成すること。11 事情をおしはかりいゝ加減に推量すること。
- 二四八 1 やけてあつくなること。2 おしひろげて缺所なからしめること。3 世のために力をつくすこと。4 口惜しさ。5 道々。6 爭論せられる田。
- 二四九 1 どうかすると。2 ただす。3 かたくなで道理にくらく、片意地なこと。4 かたよつた考。ひがみ心。5 亂を除き正しきにかへすこと。6 氣候の極めて順當であること。7 獨居の寂しいさまをいふ。8 少量の飲食物。飯を竹器に盛り漿をつぼに入れる義。9 酷な税をとりたてること。10 せめて貨財を貪り求め取ること、又苛税をとりたてること。11 七月十五日。12 皇太子御誕生の時。13 御病氣が御平癒ならせられない。14 二四六の二三参照。15 世間に減多にない高僧。
- 二五〇 1 ケンチ。上下。優劣。2 セツナ。瞬間。3 ランシヤウ。物事のおこり。4 ショウヨウ。誘ひすゝめること。そのかすこと。5 セツシヨウ。敵の來るなくじきとめること。又國際上の談判、かけひき。6 フェン

甚

ひきのばすこと。7 ハイタイ。みごもり。きざすこと。8 カンカク。互に相容れざること。9 シマ。おしはか
ること。10 タンデキ。物事にふけりおぼれること。

二五一 1 仕方なしに。2 なやましい。3 美しい心。4 足かせと手かせ。5 つなぎしばる。束縛する。6 苦しめ
る。7 ゆたかである人。

二五二 1 陰曆八月。2 十分でない。3 知ることと行ふことは合致するもので、知れば必ず行ふものだといふこ
と。4 目標。めど。5 ぼんやりして居るさま。6 たち場。7 一段高くぬきでるさま。8 ぐづ／＼してどちらに
もつかぬこと。9 ぐづ／＼して心のきまらぬこと。10 批評又は非難される地位に居る。11 強くたけさま。12
勘定づくであること。13 無關係。14 その物事の範圍外にあつてたづきはらないもの。15 四圍の外界。

二五三 1 一寸。2 かほつき。3 おそろしい。荒々しい。4 一冊の本。5 涙の流れるさま。6 水のはとり。7 涼
しい風とほがらかな月。8 ゆつたりとしたさま。9 氣に入ること。10 湖水の中央。11 非常に仲のよい友達。12
ゆたか。13 しづかな雲と一羽の鶴。

二五四 1 得意ぶる。2 けいべつ。3 諸役人。4 仲間。5 我慾少くして性行のいさぎよいこと。6 世間のきこえ
評判。7 衆人の評議。8 前よりのしきたり。9 後の災難。

二五五 1 「さびしさに宿たち出で、ながむればいづこも同じ秋の夕暮」によつた。2 静か。しめやか。3 美し
い都。4 狭い。5 はつきりとはないが、どことなくその勢をあらはして居るさま。6 舌を木で作つた鈴。支
那の昔文事に關する教令を布く時に鳴らしたもの。轉じて人の教道をする事。7 天皇又は將軍の旗。こゝは
「小説真隨」といふ小説に關する主義を堂々と唱へて文壇に出たことの譬。8 坪内逍遙博士をいふ。9 政治上

の事柄を材料として作つた物語體の戲作。10 おもひかへすさま。又は心を改めるさま。11 これ迄のわかつた
こと。12 實際に利用するもの、下につかはれるもの。13 徳川時代の小説家瀧澤馬琴。14 善をすゝめ惡をこらす
事を目的とせる考。15 主觀を交へずしてありのままにうつすこと。

二五六 1 身分不相應の幸。2 天地間の萬物を創造した神。3 たくみて人を陥れるおとしあな。4 はかりごと。
5 すくない。貨幣や貴重な郵便物をおさめたふくろ。7 一六五の一九参照。8 おだやかで無理のない性質。9
まぼろしのきえるやうなはかないことのかなしみ。10 不都合者の名をのせた帳簿。

二五七 1 風流の希望。2 音曲。3 年月。4 法則。5 承認する。
二五八 1 うはべばかり見た。2 かるはづみな。3 異なるもの、類似せる點によつて等しきもの、如く推知するこ
と。4 狂はんばかりに切に思ふこと。5 火の原野をやくやうに烈しいこと。

二五九 1 2 3 一九五参照。4 あとにのこしたはかりごと。5 誤の多い作。そろろ。6 こま／＼しいこと。くだ
／＼しいこと。7 客觀の事物。8 世上の噂。9 高僧。

二六〇 1 天性すぐれた才能を持つて居る人の書いた文。2 すぐれた本。3 親み近づくこと。4 ぶら／＼と遊び
あること。5 感興を起すべき状態に對する人々の意識。6 ひらくこと。7 趣向の新奇なこと。8 漸次に養ひ
成すこと。9 なりふり。すがた。10 くるしみもだえること。11 おもむき。12 いろ／＼のありさま。13 なえち
みあとへしりごむこと。14 綱紀はものごとの大本、國家の政治。正はたゞすこと。15 かぶら矢。轉じて物事の
始をいふ。16 諸國をめぐりあるく僧。轉じて徒歩で遊歴すること。17 その人の親交せずして私かにその人を學
ぶこと。

二六一 1 あぶない時機。2 きさず。3 氣焔を吐く。4 うつくしいとさか。6 たかいこと。7 たれる。8 目負するさま。測歩は大またであること。9 昔。10 一つの影。11 よろめくこと。12 同上。13 かやうにむさくるしい賤しい家。14 よりどころ。たより。15 前世。16 浮世をのがれる。17 造化は宇宙を經營する神。樞機はくるゝ、かなめ。18 自然のさとしに接せよ。19 兩刀を賣つて武士の風をすてる。

二六一 1 御讓位ならせられた。2 まだ御讓位遊ばすにはお早い。3 御窮屈。4 却て。

二六二 1 水の盛に流れるさま。廣大なさま、又轉じて人皆社會の風潮に従ふをいふ。2 身をかめて敬ふこと。3 ひざまづきすはる。4 座蒲團。5 本をのせて見る臺。6 まはり遠いこと。7 面白味のないこと。8 心の稍々複雑な感情で、主として生理的原因から起る心的状態をいふ。9 ほとばしり出る。10 何か事あるごとに。11 むやみに。12 ちゃんとした人。13 馬鹿らしい。14 無事。15 人間一生の早く終ること。15 寂滅、入滅など、譯す。大乘では迷妄を脱却して功德を圓成し不生不滅の法身の眞體に歸すること。小乗では煩惱を脱却して灰身無爲に歸すること。17 金で飾ること。18 かはる。19 時勢の變遷の甚だしきをいふ。

二六二 1 なさけなく。2 びつしよりぬれるをいふ。3 とゞまる。もれずに居るをいふ。4 仕方がない。5 むだな。つまらない。6 盛なほまれを何とも思はない。土芥は土やあくた。つまらぬもの、譬。7 千年。8 せんじつめれば。つゞまるどころ。9 文章家。10 すぐれたるさま。11 美しいさま、盛なさま。12 おもむき。13 内部からわき出るさま。14 すがたを正すこと。15 量の多いこと。16 紙面。17 智慧のすぐれた人。理に明かな人。18 いたみかなしむさま。19 さゞいなこと。20 文字のつかひかた。21 やうす。おもむき。

二六三 1 春の頃の野邊のそゞるあるき。2 豫約。3 陰曆三月。4 實際の事實又は状態のあらはれてある世界、

即ち經驗の範圍。5 あづけたのむこと。6 必ずさうあるべきかた。7 天子の他人を強制し服従せしむる威力。8 もとゝなる標準。9 倫理學上からいへば、國家の安寧福利を保護増進するは人生行爲の目的なりといふ説。經濟學上よりいへば、國際貿易政策上國家を單位とし其の利害を標準とするとの説。10 そむきもとること。11 ひなんすること。

二六四 1 歸着する趣旨。2 とらへる。3 二語をつみとり、4 自分の出來上つて居る考。5 人の過言又は弱點につけ入つて責める。6 大に人を警醒せしめること。

二六五 1 部屋。2 僧侶の居所。3 燈明。4 伴ふ。つれる。5 相手となつて機嫌をとること。又看護をいふ。7 年寄る。8 かりそめである。つまらない。9 再び申上げる。10 なす事もなく退屈なこと。11 さして。12 思ひかけて忘れ得ないこと。13 いたましましさま。14 景色のあれすさびて物凄うこと。15 みじめな不幸。16 存命中。17 高い地位。18 前世の因業。19 あるさまはること。行きつもどりつすること。

二六六 1 意味。2 漢字。3 日本の詞。4 なすこともなくて退屈であること。5 申上げる。6 私事の反對。公事を掌つて居ることが出來ず。8 國司。9 昔國守が任國に赴かなかつた時、その代理となつて任國に赴き事務を掌つたもの。10 こはい。11 つや／＼しく美しいこと。12 朝廷の方の事。13 稍々複雑な感情で主として生理的原因より起る心的状態をいふ。14 つよいこと。15 やや。16 題目の材料。17 人間一生の悲惨又は惡徳の存在せる方面。

二六七 1 忽の十倍、零數の名目。2 十絲をいふ。3 考、計畫。4 心の中。5 心中のゆつたりとして廣いこととせまいこと。6 さらげ出す。7 六道の一、衆相山中又は大海の底にあつて常に三十三天と戦ふ所の天趣の類。

8 天台、眞殿の高徳の僧。9 どうして満足の出来ることであらうぞ。10 むさくるしいすまひ。11 悲しいなどい
つた所で及ぶことではない。

二六八 1 強ひて我慢して。2 成程と思はれる。3 名前。4 實際。5 名づけ呼ぶ。6 すぐに。7 頭のはたらき。
8 一人が虚説を傳へると衆人實事として之を傳へるとの譬。9 ワイ／＼と。10 理由もなく他人の説に賛成する
こと。11 つたはりひろがること。12 一つの大きい時勢のなりゆき。13 鶴のなく聲をいふ語。14 とくろくさま。
15 先んじて着手する。16 原因する。

二七一 1 なまけ怠ること。2 いひかへると。3 わづかの成功に安心する。4 同盟したもの、中で主長の地位に
たつもの。5 はげみつとめ努力する。6 なほざりにすること。7 考へまちがひして居る。8 國と國との間のも
つれ。9 國と國との間のもめを平和手段で解決しようといふ約束。10 自然に。11 程よく物を並べる義で、うま
くをさまつて行く意。12 物事の物質上の性状を有するにいふ語。精神的の對。13 ほんとの有様。14 明かにする
15 安泰を求めて一時のがれのことをする。

二七〇 1 南無阿彌陀佛。2 南無妙法蓮華經。3 太政大臣、左大臣、右大臣、又左右大臣と内大臣。4 源、平、
藤、橘。5 甲乙丙丁戊己庚辛壬癸。

二七一 1 ふと。2 徒歩で遍歴するといふさま。3 私慾の心。4 三月十五夜の夜の頃。5 秋から冬にかけて吹
くきつい風。6 おもて。こゝは姿といふ位の意。

二七二 1 至言。2 孔子。3 品性の修養ます／＼進み、心一切の外物と融合して耳にする所何等の障礙をも生ぜ
ざること。4 欲する。5 誠をあらはさせないやうにする。6 しやべること。7 いひわけ。8 諫言忠告などのよ

くきかれぬこと。9 よいとこ。10 カツルキ。つたかづら。11 ころびおちる。12 時代のならはし。13 反省の功
14 深くいたる。深くなる。

二七三 1 並々でない面白い考。2 立派な人。3 たま／＼。4 たけの低い木。5 かたよること。6 つもりつもつ
たならはし。7 手かせ足かせ。東總。

二七四 1 ならはし。風俗。2 又。3 古風。4 「ふり」の枕詞。5 書物など。6 音楽や自然の花月。7 養育する。
かはゆかりなさけをかける。

二七五 1 ことばの使ひ方や作る上の工夫。2 一心になるさま。3 天地間の深い理。4 人生のおくそこ。5 昔の
賢人。6 技巧のあや。7 優劣。8 一代の教導者。9 理を非に曲げていふこと。好んで奇怪な説を吐くこと。又
其の議論。10 はびこること。11 車行の不利なこと。轉じて不遇の意。12 不幸と幸とは繩の交互に來る。13 テイ
セイ。後進者を誘導すること。14 老後をあやまりなくすごす。15 ヒチリキ。樂器の名。16 イブカしからずや。
うたがはしいではないか。17 シノギをケズる。はげしく戦ふ。

二七六 1 見て。2 物事舊弊に囚はれて間に合せのだ。3 頑固でわからずや。4 蓄くさくて世の中の實際にうと
いこと。5 かるはづみで薄つべらだ。6 しつかりした守り所がない。7 支那の地南は水多く船で旅をし、北方
は山多く馬で旅をするをいふ。8 正道ならぬ學問をして世におもねること。9 天子の御一門をいふ。10 自己の
智慮品性若くは方策意見等を鍛練する所縁となるべき困難又は反對者迫害者等をいふ。11 大臣の異稱、詳解既
出。12 その容貌をあてとして所在不明の人をさがすこと。其の人相書によつて其人をさがすこと。13 キヨハク
すぐれた人。かしら。14 考のないこと。根據のないこと。15 あわてること。16 ソホウ。富豪。

- 二七八 1 シソウ。おだてる。そそのかす。2 敵の来るのをくじきとめること。又國際上の談判。又かけひき。3 ひねり出す。4 あやつること。5 物事に熱注すること。6 明言すること。公言すること。7 むりにもとめること。8 みとめてよしとすること。9 宿題。10 止めること。停滞すること。11 人物を採用するにその學識を試すために問題を與へて答案を作らしめること。12 實際にあらはすこと。13 なほざりにすること。14 とりのけやめにすること。15 互に折れあふこと。和合の話のまとまること。
- 二七九 1 鏡の上に着る表衣。陣羽織の類。2 年月。3 子供等。4 話の種。5 おれ。6 心一ぱいの悦。7 うはべをかざること。8 わるいとこ。9 嚴正で節義をあげない議論。10 一代の教導者。11 制御に従はずほしいままであること。12 國家を治める立派な考が心にみちて居る。わが身の利害を考へず主君の爲に忠節をつくす。
- 二八〇 1 権力ある高貴の家。2 奥深い宮殿の中。3 如何に人生の處し難くつらいものであるか。4 一目で指圖すれば。5 うまい御馳走。6 めぐりあはせのかはつて來ること。7 コンバイ。困りきること。8 あわ。
- 二八一 1 不名譽なことだらう。2 人を導き教へること。3 おだやか無理がなくてよく相應じて居ること。4 一寸の間。5 かるがるしくはなやかでやりつばなしであること。
- 二八二 1 亂雑である。ごたごたして居る。2 由緒ある。3 氣のせいでも誠に貴く思はれる。4 本當のすがた。
- 二八三 1 本當の自分。2 心的作用の一切をいふ語。即ち、知覺情意等心の事實は意識の現象である。3 いろいろと。4 はた。5 あらはれたるさま。見えるさま。6 そのもの。7 事物の肝要な所。又事を完全に成し遂げること。をいふ。轉じて、文章の一篇の主旨のある所を發揮するなどを評していふ語。8 自己の才能をかくして塵の世にまじり居ること。9 賤しい者の住むべきいぶせき家。10 神道。11 浮世の束縛。

- 二八四 1 シメナハ。神樂などに張つてある繩。2 ミツガキ。神社のかき。3 何だかぼんやりしてはつきりしないことをいふ。4 神事の事をいろいろとする意。
- 二八五 1 進んで事をなさないこと。2 衰へあとにしざること。しりごみすること。進取の反對。3 堅苦しい小人のさま。又鄙賤な形容に用ひる。こは現状を大事に守つて進取の氣象のない様を形容した。4 一時のまにあはせな事をして安心を得ること。5 信念が確立し身世の安危に處して何等疑惑恐怖のないこと。6 おちかひの文章。7 なまけてきまななこと。8 一般の人に選舉權を有せしめる制度。9 當事國の全權委員が合議談判して設定した條約の案文を其國の主權者が承認すること。10 君主又は國家に對する臣民の義理と、名によつてあらはれた人倫上の分限で、君に對しては臣たる分限のある等のこと。11 平和の恒久的保證として國際組織。12 獨立して思考し行動し得る個體。倫理學上では、精神の統一を持續して意識的行動をなし、道德上の責任をも受け得られる資格ある個體。簡單にいへば、人間の心のはたらきが理性によつて統一されたもの、即ち人から二八六 1 不分明である。筋道がたたない。2 消されて。3 狭い荒れた庭のちがやの露に光が映るをいふ。4 所狭く窮蹙。5 身分の高い者も低い者も各自の住居の分限に應じて。6 心使ひ。7 情趣。8 或物を愛してそれに心の執着すること。9 眞の悟り、眞理に對する明かな心の悟りを譬へた。10 人の心を迷はすやうな悪魔的の性格。11 凡夫が妄想に囚はれて捨てることの出來ないのをいふ。12 疑ひおそれること。13 邪見を去つて心を佛の正法の上に安住すること。
- 二八七 1 心を痛める意。續古今集に「旅人は袂すずしくなりけり關吹き越ゆるすまの浦風」。3 波の寄するに夜をいひかけた。4 俄雨。5 きら／＼と光るさま。

二八八 1 主義主張などを最も簡単な語であらわしたるもの。モットー。2 脚本の仕組み。又或語の筋を一つの演劇として仕組む意。3 自分及び自分の相手以外のすべての人。又その事に關係のない者の意。4 小手先の調子をしらべること。或事をする前に具合よく行くかぬかに就て大體の調子をためして見ると。5 長引いて決定しない評議。9 筆のまにまに見聞感想など書いたもの。7 澤山。8 論所も深い程。9 文の姿態は悪くなつて10 賢ぶつた。

二八九 1 老先生。2 經驗のつんだ大學者。3 仁愛と義理と、又人間の履行すべき道德を總稱していふ語。4 人の守るべき五つの道。父子間には親、君臣間には義、夫婦間には別、長幼間には序。朋友間には信あること。又仁、義、禮、智、信の五徳をいふ。5 承引されない。6 俗人が聞いて悦ぶやうにする。7 時世の好みにうまく合せようとする。8 世の中にこびへつらつて學問を曲げること。9 ます／＼立派な方へのびて行く根底の原因。10 芽出すさま。11 種々様々の美しい花に先立つて咲く。12 落花。

二九〇 1 天皇の崩御をいふ。2 天子が政務に御勤勉であらせられること。3 御壽命。4 はらわた。5 家が並んで立ち續いて居ること。6 うゑごみ。前庭。7 季節を知つて居る風に。8 もとから居たのだらうか。9 新參の虫。10 ぼつぼつ。11 興に乗じて即座に作ること。12 韻文であるべき詩を散文體に書いた變體の詩。13 眞理を含めた簡明奇抜な文句。14 かりそめにも口を突いて出る言葉も自然立派な句をなすとの意。咳唾はせきをして吐くつば。15 美しい詞藻を吐く天才ある者の譬。16 五色のきらびやかな絲。17 ながく續くさま。

二九一 1 何かといふ時。2 尤もらしく。3 高尚で人生に適切でない事を考へるのをいい事として。4 奥深い哲理。5 いたましい難行苦行。6 心の安住を求める道。7 物事の稱呼上のまさりおとり。8 一時代の人民。9

眞に信仰して心身を捧げてそれに歸依するといふ大きな道。10 はてしもない非常に大きい智慧。11 世の中を指導警醒する人。12 無理にこじつけること。13 自分の心で人の心中をおしはかること。14 人物批評。15 原義は時代が相違して居るをいふ。轉じて、時代の思想にあはぬことや時代に背馳逆行したことに用ひる。16 カガシ。おどし。鳥を威すもの。

二九二 1 風流のないのを。2 切れはすまいかと心細く思はれる絲で釣つて。3 人世のさまになぞらへ。4 葉數を少くすること。5 色が薄くなること。6 むしりする。掻遣捨つ。7 榮達する人。

二九三 1 Egoism. Nationalism 等のismで何々主義といふその主義のこと。2 指導するもの。3 はした。こぼれ水をこすこと。

二九四 1 だろ。2 子供等。3 はやす。生む。4 非常に。5 歐陽明。6 文章がうまいこと。7 事業の功績。8 言語文辭は潤色するに及ばない。只要領を得ればよいの意。9 おも／＼しくどつしりした充實した文。

二九五 1 サウメイ。蒼海。青海原。2 のり。制度。轉じて古の制度文物を知るべき書物。3 シジュン、とひはかること。相談。4 重低に堪へる才器ある人。5 武人が久しく戦場に臨まず、馬に乗らぬためもの肉の太つたのを嘆ずること。無事に苦しみ功名のたてがたきにいふ語。6 道にきき道に説く意で、聞きしままの物語即ち善言を聞いても心に留めず深く自ら省みないことにいふ。7 物事に疑ひ深く／＼して事を決しかねるをいふ。8 共に賤役に服しかすとぬかをなめて艱難した妻。9 ショウヨウ。誘ひすすめること。そそのかすこと。

二七六 1 その場にのぞむ。そのことに當る。2 つむじ風。3 あまりのあること。胸の内のゆつたりとして居る

有 所 權 作 著

こと。4 二八八の三参照。その事に関係のない一般の人。5 幼少の子供。6 村里。7 わるもの。

二八八

參 學 生 國 語 問 題 集 (終)

大正十四年九月十日印刷
大正十四年九月十五日發行

附 奧 集 題 問 語 國
錢 拾 五 圓 壹 金

著 者 荒 瀨 邦 介

發 行 者 大 阪 市 西 區 西 長 堀 南 通 二 ノ 七 脇 阪 要 太 郎

印 刷 者 大 阪 市 浪 速 區 久 保 吉 町 一 二 三 九 吉 田 由 治 郎

發 行 所 大 阪 市 西 區 西 長 堀 南 通 二 日 本 出 版 社
(振替大阪三四一三二)

發 行 所 福 岡 市 大 名 町 二 丁 目 福 岡 英 數 學 館
(振替福岡一九七八六)

2143
二

氏諸家名代現ため蒐に書本

現代名家詩集

川路柳虹	鈴木信治	萩原朝太郎	藤森秀夫	百田宗治	蒲原有明
西條八十	竹友藻風	三木露風	佐藤春夫	佐藤清	北原白秋
人見車明	與謝野晶子	恩地孝四郎	霜田史光	林信一	山村暮鳥
河井醉茗	生田春月	千家元麿	野口雨情	大藤治郎	福田正夫
井上康文	福士幸次郎	多田不二	佐藤一英	國木田虎雄	野口米次郎
堀口大學	柳澤健	岩野泡鳴	近藤榮一	高村光太郎	富田碎花
木下李太郎	加藤介春	白鳥省吾	室生犀星	中西悟堂	佐藤惣之助
中田信子	山宮允	正富汪洋	横瀬夜雨	岩佐頼太郎	茅野蕭々
日夏歌之助	橋本實俊	與謝野寬	北村初雄	竹村俊郎	平戸廉吉
澤ゆき子					

菊判半裁形絹布綴
函入金美本全一冊
定價六錢
送料

發行所 大阪西區長堀通二
日本出版社
電話新三三五四四
替大版三四二

323

646

終